ISSN 1348-4192 ・ 第 10 号 ・ 2011 年 12 月

東北人類学論壇

東北大学大学院文学研究科 文化人類学研究室

論文

陳 珏勲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
神仏習合、分離、新習合
―浅草寺本尊示現会の「復活」にみる神仏習合の現代的構築

研究ノート

中嶋 朋哉・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22
主婦が結ぶ縁
―ママさんブラスでつながる女性たち

成田 梨加・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
「文庫」の人類学的研究
―母親の集う場の一考察

資料と通信

高倉浩樹・川口幸大・曽我亨・坂井正人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
じんるいがくフェスティバル報告

東北人類学論壇

Tohoku Anthropological Exchange

第 10 号

2011 年 12 月

目　次

論　文

神仏習合、分離、新習合
―浅草寺本尊示現会の「復活」にみる神仏習合の現代的構築
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・陳　珏勲 1

研究ノート

主婦が結ぶ縁―ママさんブラスでつながる女性たち
・・・・・・・・・・・・・・・・・・中嶋 朋哉 22

「文庫」の人類学的研究―母親の集う場の一考察
・・・・・・・・・・・・・・・・・・成田 梨加 42

資料と通信

じんるいがくフェスティバル報告
・高倉 浩樹、川口 幸大、曽我 亨、坂井 正人 56

『東北人類学論壇(Tohoku Anthropological Exchange)』規程　投稿規定
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 78

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange10:1-21(2011)

神仏習合、分離、新習合
―浅草寺本尊示現会の「復活」にみる神仏習合の現代的構築

陳 珏勲

1. はじめに

明治維新の神仏分離令以降、6世紀から続いてきた神仏習合の関係は表向き廃棄されて今日に至るとされている。しかし、実際に信仰実践が行なわれる現場に身を置いて見直してみると、神仏分離という言葉が含意する距離感が保たれているようには思えない。本稿では東京都台東区浅草の浅草寺と浅草神社にみられる宗教と社会の関係に着目することで、神仏分離では切り取れない神道と仏教の関係性を明示する。

古代から中世を経て近世へと[1]、浅草寺は観音信仰の舞台として人々の尊崇を集めてきた。仏教伝来以来、神と仏が密接に関係する形態は神仏習合と呼ばれる。江戸期には浅草寺と浅草神社は一体となった宗教施設であり、宗教儀礼も共同で行われていた。しかし、1868（明治元）年の神仏分離令によって、神仏習合は禁じられ、神と仏は完全に分離するように命じられた。これにより、浅草寺に併設されていた「神社の部分」は浅草寺と切り離されて「浅草神社」と呼ばれるようになった。それ以来多くの儀礼はそれぞれの施設で個別に行なわれるようになったのだが、今日でも「浅草寺本尊示現会」という儀礼は浅草寺と浅草神社が共同で行っている。

本稿では、この浅草寺本尊示現会を事例とし、浅草神社と浅草寺の起源と歴史及び現代の浅草寺本尊示現会の考察を通じて、浅草の宗教と社会の関係を考察する。日本の宗教界において通常言われている神仏習合とは異なる関係のありかたを明らかにしたいと思う。

[1]「応永縁起」によると、浅草寺は628（推古天皇36）年に創建された。飛鳥時代から江戸時代まで浅草は浅草寺を中心にして繁栄してきた。

(1) 浅草

本稿で事例とするのは東京都にある浅草地域である。浅草は東京の東南、隅田川の西岸低地に位置しており、7世紀から観音菩薩を祀る浅草寺を中心として発展してきた。「浅草」という地名の起源と年代については諸説あり、網野（1982）によれば、①茅芝草を起源とする説、②アイヌ語を起源とする説、③チベット語を起源とする説、④麻草を起源とする説、⑤アカザを起源とする説、⑥その他の諸説の6説に分類されている。②はアイヌ語の「アツアクサ」で、アツは「海」、アクサは「越える」から、「海を越える」という意味であるという。③は、チベット語のアーシャが「所在地」を、クシャは「茅」また「聖」を意味し、観音菩薩が奉じられる、「聖なるものがいるところ」から名付けられたとされる。④の麻草説は、浅草寺観音像の発見者が漁狩のかたわら麻を栽培していたところから、はじめ「麻草」といい、それが転じて「浅草」になったとするもの。⑤の「アカザ」説は、この付近にアカザが繁っていたことに関連しているというもの。⑥のその他の諸説には、例えば、観音に参詣する人々が近在各国から日々きびすを接して参集したために、草は常に踏まれて浅々しかったというものや、牧場だったので朝草刈りをしたためだという説もある。現在では、①茅芝草を起源とする説が定説とされ、「往古浅草の一劃は、茅や芝草ばかりが生き繁っていた草原であったところから、京都の深草に対比して、浅草の地名が生まれたのであろう」（網野 1982：34）と考えられている。

「浅草」に関する史料の初出は『吾妻鏡』の1181（治承5）年の項であり、そこに「浅草」という地名が記載されている。

> 若宮営作の事その沙汰有り。而るに鎌倉中に於いて然るべきの工匠無し。仍って武蔵の国浅草の大工字郷司を召し進すべきの旨、御書を彼の所の沙汰人等の中に下さる。昌寛これを奉行す。

これによれば、若宮を造営するため、鎌倉幕府が武蔵の国浅草の大工を鎌倉まで招いたという。すでに当時の浅草には集落があって、技術の高い大工が住んでいたことがうかがわれる（網野 1982）。

元々は草の茂っていない浅草寺周辺だけを「浅草」と呼んだのであるが、徐々にその一

帯が民衆の信仰と文化の中心地として発達していった。江戸時代になると浅草はその範囲を広げ、江戸を代表する盛り場となった。浅草寺の観音菩薩には浅草周辺からだけではなく、日本各地から人々が参詣に訪れ、また江戸城付近に住んでいた武士なども年中行事に参加するために浅草に集まった。

江戸期の浅草寺は特定の檀家を持たず、「一切衆生」に向かって開かれた寺院で、今日のものよりもその規模は大きかった。1654（承応 3）年には浅草寺で最初の開帳[2]が行われ、また遠来の神仏の御本尊を浅草寺境内へ招いて出開帳を行うこともあった（堀切 2005）。江戸の町を焼き尽くした明暦の大火（1657 年）の後、吉原遊廓が浅草へ移されると、芝居小屋も建てられて猿若三座の歌舞伎芝居が盛況を極め、浅草寺境内の奥山には見世小屋と大道芸人が集まって「新吉原不夜城」の賑わいをみせた。こうして江戸時代の浅草は、水辺の聖なる空間から、隅田川、吉原、猿若町等の名所・行楽地・盛り場といった多義性と複合性に満ちた独特の地域をかたちづくってきた（陣内 1991）。そして浅草はその後も庶民の信仰と娯楽の中心地として発展を続け、今日に至っているのである。

⑵　浅草寺本尊示現会

浅草では「浅草寺本尊示現会」という儀礼が行われている。「本尊」とは浅草寺に祀られている「観世音菩薩」を意味し、「示現」とは神仏が人々を救うために様々な姿でこの世に現れることを表している。1945（昭和20）年3月初旬の空襲で浅草は焦土と化したが、戦後には浅草の復興が進められ、観光資源の充実のために地元で浅草観光連盟[3]が組織された。終戦から13年経った1958（昭和33）年、戦災によって焼失した浅草本堂の落慶記念行事として「金龍の舞」が始められた。この舞は、浅草寺の本尊である観世音菩薩像が隅田川からすくい上げられた時、金龍が天から舞い降りて観音像を守護したとされることに由来する（浅草観光連盟 1997）。以後毎年の3月18日に「本尊示現会」として浅草寺の本堂で仏教の法要を行い、境内で金龍の舞を舞うことになった。

しかし、もとは浅草寺の主催で行われてきた仏教行事でありながら、この本尊示現会は、

2　開帳とは、秘仏として平生は参拝を許さぬ仏像を一定期間、その帳を開いて信者に結縁の機会を与えることで、近世には日本全国に普及し、とくに京都、大坂、江戸では盛んに行われるようになった（比留間 1980：23）。

3　浅草観光連盟は昭和22（1947）年に創立された。戦後の浅草の復興や観光発展のために運営されている。

2000（平成12）年から浅草の地元団体の呼びかけで浅草寺と浅草神社が連携し、「浅草寺本尊示現会」という名のもと、観世音菩薩の示現と浅草の復興を祝う行事となったのである。すなわち、「浅草寺本尊示現会」では仏教と神道の儀礼が同時に行なわれ、ここに浅草地域において新たな神仏習合が成立したということになる。

2. 浅草寺と浅草神社の起源、およびその組織

(1) 浅草寺

浅草寺の起源についての初出は『浅草寺縁起』[4]（応永縁起）である。1398（応永5）年ごろ成立したとされている『浅草寺縁起』には、浅草寺創建から応永年間（1394-1427年）までの歴史が記されている。それをまとめるなら以下のようになる。

628（推古天皇36）年3月18日、漁師の檜前濱成・竹成の二兄弟が隅田川で漁に精を出していたが、その日に限り1匹の魚も捕れず、ただ人型の像だけが網にかかった。はじめ兄弟はそれが観音像であることを知らず、像を海中に投げ捨てたが、何度場所を替えて網を打ってもかかるのは不思議と人型の像だけであった。最後には兄弟もその像を今の駒形から陸に上げた。そして10人の草刈童子が力を合わせて近辺にアカザを切って草堂を作り、その像を安置した。その後、檜前濱成と竹成は当地の文化人であった土師真仲知にこの出来事を語った。土師はこの像が聖観世音菩薩像であることを知ると、自ら出家し、屋敷を寺に改めて深く帰依したという（網野 1982）。

645（大化元）年に勝海上人が浅草寺に参詣して観音像に祈ると、観音が示現し、その夢告に従って本尊は秘仏と定められた。勝海上人は堂塔の再建に尽力して浅草寺の開山となった。平安時代の857（天安元）年には、比叡山延暦寺の僧である慈覚大師円仁が東国巡錫のおりに浅草寺に一夜参籠し、そのさい夢に現れた三社権現のお告げに従って伽藍を増修し、また宗旨を天台宗に定めた。慈覚大師は秘仏とされた観音本尊に代えて、お前立の観音木造本尊を彫刻したことから、浅草寺の中興の祖とされる。942（天慶5）年には平公雅が浅草寺に田園数百町を寄進し、寺の増築と伽藍の建立を行った。また鎌倉時代に

[4] 浅草寺縁起は応永縁起、慶安縁起、承永縁起、寛文縁起、享保縁起、寛政縁起の6種類がある（網野1982：1-7）。

浅草寺は将軍より篤い帰依を受けて保護された。以後、近世に至るまで浅草寺は観音信仰の名刹として人々の尊崇を集めてきた。こうした過程を通じて、浅草寺は東国有数の大寺院となっていった（堀切 2005）。

徳川家康が江戸に入国した1590（天正18）年当時、浅草寺は子院十二坊を抱える大寺院であった（小森 1978）。江戸時代に入ると、徳川将軍は天海上人の勧めに従って浅草寺を武運長久と国家安泰の祈願所と定め、1611（慶長16）年には寺領500石を下賜するなど、浅草寺と幕府の関係はきわめて緊密となった。浅草寺の住職である別当は、紅葉山御宮別当職[5]をも兼ねていた。なお天正年間（1573-1592）から慶長年間（1596-1615）にかけて別当が入る浅草寺の本坊は「観音院」と称され、寛永ごろからは「智楽院」に、さらに1685（貞享2）年に寛永寺の直接の支配下入ってからは「伝法院」と改称された（竹内 2000）。天文年間（1532-1555）には浅草寺が大きく整理され、その後、山内[6]を34ヶ寺に縮小し、寺格より衆徒寺と寺僧寺に分類される。そのうち十二坊は「衆徒」、二十二坊は「寺僧」と名付けられて法務を担当するところとなり、これら34の子院群は「浅草寺一山」と呼ばれるようになった（長島 1998）。

明治維新以降は、山内の廃寺が相次いだことから、今日では二十四坊で一山を組織するところとなり、衆徒と寺僧の区別もなくなった。また、境内にある社殿の管理も社僧から浅草寺へと移されたため、法要は浅草寺山内支院の住職自らが担うことになった。その後、特に昭和に入ってからは行事が増え、戦災後は伽藍復興に伴ってその数も飛躍的に増加していった。

⑵　浅草神社

浅草神社は明治維新までは三社権現と言われていた。江戸時代に書かれた地誌『遊歴雑記』三編巻之上に「浅草三社権現の碑」の章があり、観世音菩薩が現れた縁由が以下のように記されている（網野 1995）。

推古帝36年春3月18日、此地漁人檜前濱成、竹成網得薩垂瑞像、因安置焉、今此金龍山観音

5　将軍家代々の霊を安めるため、江戸城中の紅葉山に祈祷所が日々奉仕していた。紅葉山御宮別当は祈祷所の運営責任者となった（長島1998）。

6　浅草寺中を構成するのは一山（金龍山）34ヶ寺 である。

大士是也、三子歿、郷人崇其功以為鎮守之神、今此三社権現、既以大士出現之日祀之、大森漁人出船供祭儀、常例其来尚矣…明和8辛卯年春3月　法眼伊高敬白[7]。

この碑文よれば、土師真仲知、檜前濱成、竹成3人の没後、地元の人々はその功を尊んで、3人を「鎮守之神」として祀り、浅草寺の開拓者として三社権現の尊称を奉じて祭祀した。3月18日の祭礼当日、三基の神輿の船渡御[8]には大森の漁師が船を出し、三社権現は浅草を守る神となった。その後、権現思想の普及とともに、鎌倉時代末期には土師真仲知を阿弥陀如来、檜前濱成を観世音菩薩、竹成を勢至菩薩の化身とし、三社権現として祀った（網野 1995）。そして後世には、土師氏の子孫は半俗半僧の生活を許され、代々「専堂坊」と称した。また濱成系の末孫は「斉頭坊」、竹成系の末孫は「常音坊」と称し、妻帯僧として世襲の特権を保有していた。彼らは「三譜代」と呼ばれ、浅草寺観音堂へ一日一人ずつ当番としてつとめることになった。専堂坊は観音堂内の庶務に、斉頭坊は観世音菩薩の給仕役としてお膳や供物の上げ下ろしに、常音坊は法要の開始時刻を知らせる喚鐘の点打と鐘や木魚打ちにそれぞれ当たったようである。1873（明治6）年の神仏分離令によって、三社権現の名称は廃されて、社号は三社明神社と改称された。ここにおいて三社権現は浅草寺とは切り離され、独立したのである。その後、三譜代の土師専堂が社掌となり、三社権現は1873（明治6）年に浅草神社と再改称され、現在に至る（網野 1982）。

3.　分析事例―「観音祭」から「浅草寺本尊示現会」へ

(1)　神仏習合時代の観音祭

浅草寺と浅草神社の両施設が共同で行う宗教儀礼の代表が「浅草寺本尊示現会」であり、江戸時代には「観音祭」と呼ばれていた。江戸期の「観音祭」は浅草寺縁起に基づいた行事であり、浅草寺との関係が深い。観音祭の起源は、1312（正和元）年に「神輿をかざり奉り、船遊の祭礼をいとなみ、天下の安寧を祈り奉るもの也」（竹内 2000）という神

7　この石の碑は今日の浅草寺の本坊である伝法院北側の池畔に安置された。
8　神輿は船の上に載せて渡御する。

託があって船祭が始められたことにあると言われている。

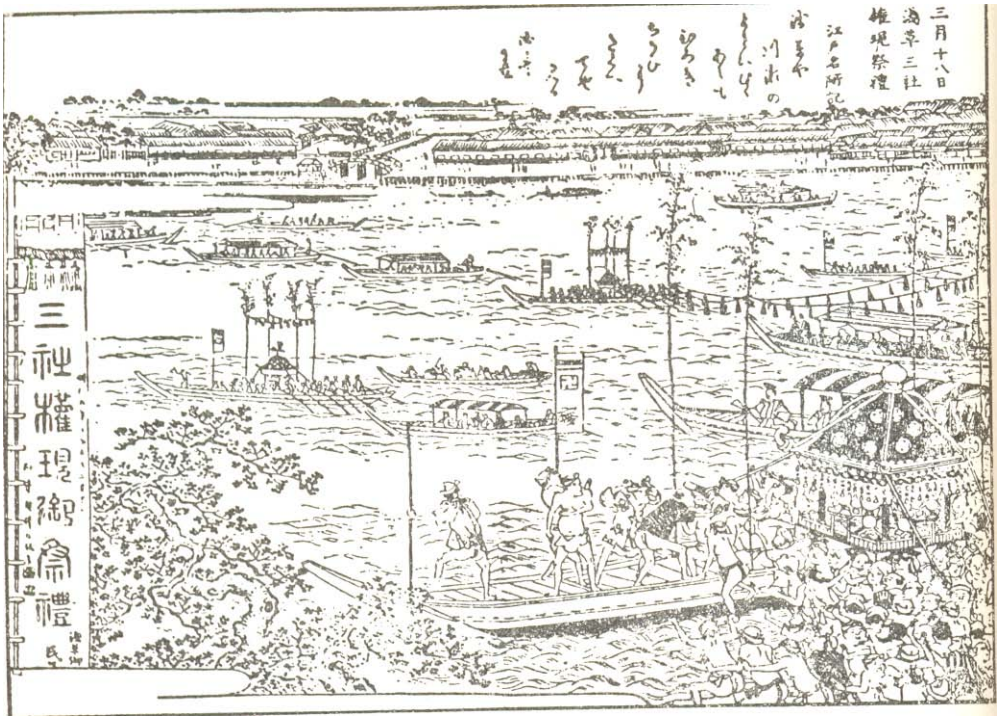

図1：江戸時代の船渡御

出典：斎藤（1838：34-35）より転載

観音祭では、土師真仲知を祀る一の宮、檜前浜成を祀る二の宮、竹成を祀る三の宮の三基の神輿がはなばなしく渡御した。当時の祭りでは、3月15日に神輿洗いが行われたあと、3月17日と18日の両日に大祭が、6月15日にはびんざさら舞[9]が行われた。本祭は丑、卯、巳、未、酉、亥の一年おきに行われた。江戸期には大祭前夜に「夜宮の式」と称して「神霊移し」が行われていた。三社の拝殿に三基の神輿を並べ、僧6人によって唄と散華の法楽が営まれる間に、社人により神輿移しの式が営まれた。神輿は鳥居を出て浅草寺本堂の正面より本堂へ登った。これを「お堂上げ」といった。三基の御輿をそれぞれ輿台に奉安すると、山内衆徒は本尊を背にして神輿に向い、式衆の唄と散華[10]によって本地仏の供養

9 びんざさら舞とは、祭の中で、五穀豊穣・悪疫消除･氏子の家内安全･子孫長久を祈願して奉納する舞である。

10 仏に供養するために紙で作った花びらを散布すること。

を行った（網野 1978）。これが終わると、神輿を観音本堂の外陣に安置して、堂前の舞台でびんざさら舞を舞った。三社の神輿は一晩中、浅草寺の本堂内に置かれることが慣例になっていたのだが、ここからも分かる通り、当時この祭りは浅草寺と浅草神社が共同で行なっており、「観音祭」又は「浅草祭」と呼ばれた。江戸時代の氏子は、南から諏訪町、駒形町、三間町、西仲町、田原町、東仲町、並木町、茶屋町、材木町、花川戸町、山之宿町、聖天町、浅草町、聖天横町、金竜山下瓦町、南馬道町、新町、北馬道町であった。このうち材木、花川戸、聖天を宮元三ヶ町と呼び、全町を総称して「浅草郷」あるいは「千束郷」ともいった（浅草観光連盟 2006）。

観音の縁日の祭礼では、現在のような本社神輿よりも、氏子の各町や、片町、茅町、天王町、黒船町、三好町など近隣の町から繰り出された山車が中心で、各町がおのおの趣向をこらして行列の勢いと絢爛さを競い合ったようである（浅草観光連盟 2006）。

祭礼当日の18日の早朝、山車を中心とする祭礼行列は浅草見附の御門外に集合し、仲見世から境内に入り、観音堂に安置した神輿に参詣の上、おのおの芸能を演じ、随身門（二天門）を出て自分の町へ帰る。これが終わると神輿三体を本堂からおろし、一之宮を先頭に浅草御門の乗船場まで担ぐ「お堂下げ」を行う。大森在住の漁師が供奉する船に神輿をのせ、浅草川（隅田川）を漕ぎあがって駒形から陸へ上がり、浅草神社にかつぎ帰ったと言われている。このような船渡御を行うものを「本祭」、境内のみで行われる祭礼を「陰祭」と呼んだ（網野 1995）。

江戸時代の神輿渡御の路線は大別して2種類があった。その一つは、浅草寺本堂を出て、随身門―（現在の二天門）―花川戸町―駒形堂と進み、駒形堂で乗船し、浅草見付で陸へ上がって、今の蔵前通りから雷門前を経て三社権現へ戻るというものであった。もう一つは、天和年間（1681-1736）に見られた、下りから上りに逆行、すなわち浅草寺本堂から浅草見付まで進み、浅草見付で乗船して駒形堂あたりで上陸し、三社権現へ帰還するという路線である（網野 1995）。いずれにしても江戸時代の祭礼は蔵前筋や浅草橋の各町にまで及ぶ広範囲なものだったのである。

この船祭は江戸末期まで続いたが、明治に入って廃絶され、1872（明治5）年からは5月17・18日の両日に祭礼が行われるようになった。明治中期から大正期にかけては山車の行列が祭礼の中心であったが、昭和初期の全国的な「神輿ブーム」を契機に神輿が中心

となり、氏子各町が神輿渡御を行う現在の形式となるに至った。戦前の神輿は徳川三代将軍家光により寛永14（1637）年に建造寄進されたもので、300年間担ぎ継がれてきた。1927（昭和2）年には三基の神輿が文化財の指定を受けて保存されることになった。

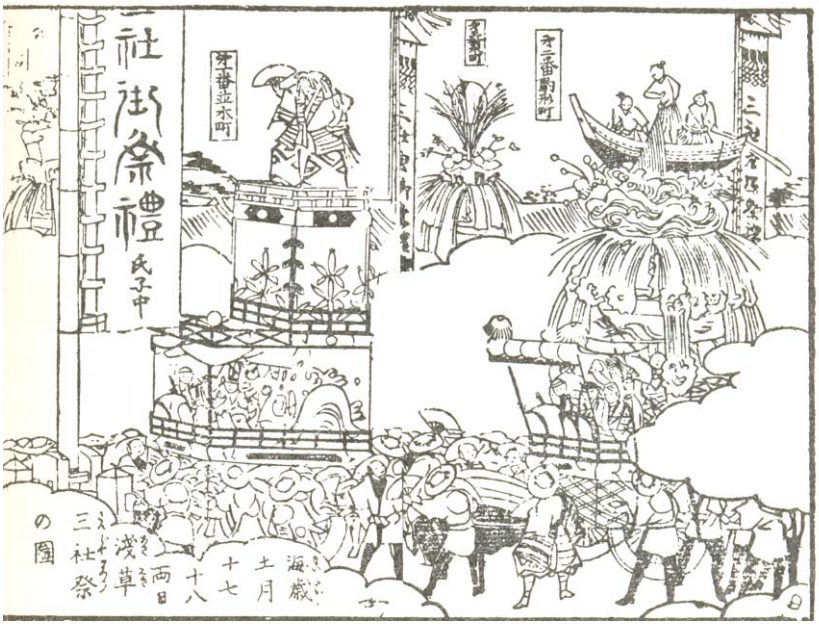

図2：明治時代三社祭の山車

出典：梅堂（1883：3）より転載

⑵　戦後の三社祭と「本尊示現会」

江戸期に観音祭として行なわれていた祭礼は、明治以降に三社祭と名前を変えて、5月に行われるようになった。しかし、1945（昭和20）年の空襲は浅草地域を焼き尽くし、新旧の神輿はすべて焼失してしまい、子供神輿が残るだけとなった。その3年後の1948（昭和23）年、浅草の復興のために観光連盟が主体となって、浅草興行組合、浅草三業組合、浅草街商親睦会とが協議した結果、5月15日から5月19日までの5日間の日程（表1）で三社祭を復活させた。これはNHKで全国中継もされた。

表1　1948（昭和23）年の三社祭日程

日にち	行事内容
1948. 5.15（土）	浅草観音吹流し奉納（浅草街商親睦会）
5.16（日）	神輿渡御、底抜け屋台（浅草街商親睦会）、手古舞（浅草三業組合）
5.17（月）	浅草神社例大祭式典
5.18（火）	浅草観音大提灯奉納（浅草三業組合）、手古舞（浅草三業組合）、神輿連合渡御
5.19（水）	唄と舞踊

出所：浅草観光連盟（1997：37-38）に基づき、筆者作成

さらに1950（昭和25）年には、戦災で焼失した一の宮と二の宮の神輿二基を氏子たちが新調した。またこのとき、雷門二丁目東部、中部、西部、仲見世、三栄、公園の六ヵ町の青年たちが本社神輿の町内渡御を円滑に行うために連絡体制を作り、浅草商店連合会とも結合して、浅草商連青年部を創立した。こうして戦後最初となる宮出しと各町内渡御が、1950年5月18日の午前6時に行なわれた。一の宮が南部23ヵ町、二の宮が北部18ヵ町を担当したが、長い間本神輿が渡御していないため、担ぎ手も不慣れであった。41ヵ町を回るコースでは、進行が予定よりかなり遅れ、結局宮入は翌日の午前時頃になってしまったのである（浅草観光連盟 1997）。2年後に三之宮が奉納されると、三基の本社神輿が浅草神社の氏子町会範囲内の南、東、西三方向に分かれて渡御できるようになり、それが今日に至っている。

一方、戦後「本尊示現会」は仏教行事として観音本堂で行われていた。戦災で焼失した浅草寺本堂の落慶記念行事として1958（昭和33）年に新たに「金龍の舞」が創始され、以来3月18日の「本尊示現会」とともに浅草寺の境内で舞われている。こうした仏教行事は現在でも続いているが、浅草地域の住民の働きかけで、2000（平成12）年から新たな神仏習合式の「浅草寺本尊示現会」が創出されたのである。

(3)　現在の「浅草寺本尊示現会」

ここでは、2006年から2008年までの3年間に行われた「浅草寺本尊示現会」に注目す

る。この浅草寺本尊示現会は浅草観光連盟、浅草観音奉賛会[11]、浅草神社奉賛会が主催し、浅草寺と浅草神社の後援というかたちをとった。「本尊示現会」は戦後間もなくより浅草寺の主催で毎年行われてきた仏教行事であったが、2000（平成12）年に地元浅草の住民が中心となり、浅草寺と浅草神社とが共同で行う「浅草寺本尊示現会」を復活させたのである。この新たな宗教行事は観光事業の一環として浅草の繁栄を促進するという目的を兼ねており、そこには浅草寺本尊示現会を通して3月18日の浅草の「誕生」を強調する意図もあった。運営は氏子の44ヶ町と浅草組合で構成される浅草神社奉賛会によってなされ、各町から推薦された青年5人が浅草寺本尊示現会の儀礼に参加し、三基の神輿を担ぐことになった。浅草神社奉賛会のK氏[12]によれば、浅草神社の氏子町会数は44ヶ町であるという。そしてその氏子組織は、「浅草神社奉賛会」という名称で呼ばれ、浅草神社の維持や祭りの運営を行っている。奉賛会が主として行っている事業は次の通りである。

(a)社殿、社務所、神輿庫、神楽殿、境内等の整備・維持・管理

(b)宮神輿の維持保管

(c)神事の保持と祭礼及び祭典の斎行

(d)浅草神社の氏子及び崇敬者の教化育成

(e)本会の財産管理及びその他の特別事業の遂行

この中で浅草奉賛会が最も力を入れている行事は、毎年5月の第3金・土・日に行われる三社祭である。2000（平成12）年から三社例大祭のプロローグとして強調された浅草寺本尊示現会も10年目を迎えた。当初、浅草奉賛会側では浅草寺本尊示現会を復活させる意義を以下のように語っていた。

> 江戸時代まで「三社祭」と一体の行事として神輿の渡御と併せて執り行われたが、明治維新以降は神仏分離令によって「三社祭」は5月に行われることになり、「浅草寺本尊示現会」の本来の意味が見失われがちになった。この「浅草寺本尊示現会」を一層賑わせることは長年の懸案となっており、2000（平成12）年「古式三社祭舟渡御」の一部として再現させることで、広く内外に浅草の生誕の歴史を広め、ひいては浅草の町の

[11] 浅草観音奉賛会は1953（昭和28）年に創立された。戦後、浅草寺本堂の再建資金を勧募するため、浅草地区の町会と諸団体を母体として浅草観音奉賛会を組織することになり、現在まで至る（浅草寺 1996）。

[12] K氏は浅草在住の男性氏子。奉賛会の事務に積極的に関わっている。

更なる発展を目指すものとして実施し、毎年3月18日に開催することになった（浅草神社奉賛会 2007）。

2007（平成19）年の浅草寺本尊示現会日程（表2）によると、まず18日の午前から浅草寺境内では「金龍の舞」である寺舞が一日3回奉演された。そして、午後2時に浅草寺本堂で「本尊示現会」の法要が執り行われた。その後、浅草寺の貫首をはじめ、一山二十四坊の住職による練行列が行われた。3月24日の夕刻には、浅草神社から浅草寺に続く参道に高張提灯を持った氏子衆が並び、松明を先頭に全ての飾りが施された三社神輿が神輿庫から運びだされた。次いで浅草神社の境内で神官が神霊入れ[13]の儀礼を行い、浅草寺一山式衆が玉串奉奠した後、氏子衆が三基の本社神輿を松明で照らされた浅草寺本堂外陣へ「堂上げ」した。本堂外陣に納められた一之宮、二之宮、三之宮の神輿三基は、本尊観世音菩薩の前で一晩泊まり、25日朝に浅草寺本堂での浅草神社宮司による祝詞の奏上と浅草寺一山式衆による読経の後、氏子によって本堂より「堂下げ」された。続いて、三基の御神輿は本堂西側を回され、浅草神社の鳥居前まで台車で移動された後、そこから宝蔵門前までの渡御が行われ、浅草寺境内に安置された。そして夕刻4時には氏子衆の手により浅草神社に還御され、その後神官よる神霊返しの儀が行われて、浅草寺本尊示現会は終了した。

表2：2007（平成19）年浅草寺本尊示現会日程

日にち	時間	行事内容
2007.3.18	午前11時から	金龍の舞一日中3回奉演（浅草寺境内）
	午後2時00分	本尊示現会の法要（浅草寺）
2007.3.24	午後6時00分	神霊入れの儀、斎行（浅草神社）
	午後6時50分	本社神輿三基発進、浅草寺本堂前に移御
	午後6時55分	本社神輿三基、浅草寺本堂前に到着、本堂御扉開扉
	午後7時00分	「堂上げ」開始（浅草寺）
2007.3.25	午前10時10分	浅草神社神官祝詞奏上、浅草寺一山式衆読経（浅草寺）

[13] 神霊入れとは、神官が神社から神のみたまを神輿の中に入れる象徴的な儀礼である。

	午前11時30分	「堂下げ」開始（浅草寺）
	午前11時45分	堂下げ終了後、本社神輿三基本堂西側を廻り、浅草寺境内に安置（浅草寺境内）
	午後 4時00分	本社神輿三基、浅草神社へ還御し、神霊返しの儀　斎行（浅草神社）

出所：浅草神社奉賛会（2007）に基づき、筆者作成

浅草寺本尊示現会は江戸時代の三社祭であり、「船祭」や「観音祭」と呼ばれて、3月17・18日に行なわれていたが、神仏分離令によって神社の儀礼と仏教の法要に分割されて行われてきた。それにともなって、明治期より「観音祭」が「三社祭」と呼ばれるようになり、5月に行われることになった。しかし、浅草地元住民の努力によって、2000（平成12）年から「浅草寺本尊示現会」として神道と仏教が習合する形式で行うことになった。この浅草寺の僧侶らによる読経と浅草神社の宮司祝詞奏上を同時に行う行事は、地元浅草の住民や三社祭の参加者にとって神仏分離以前の観音祭と呼ばれていた三社祭の一部を「再現」していることになり、それゆえに5月の三社例大祭のプロローグという大きな位置づけがなされているのである。

写真1：氏子よって神輿が浅草寺本堂から「堂下げ」される

（2007/3/25　筆者撮影）

4. 浅草寺本尊示現会の影響

次に、現地での聞き取りと新聞報道[14]をもとに、「浅草寺本尊示現会」の「復活」が参加者である氏子と観客にもたらした影響を明らかにしていきたい。

(1) 新聞報道資料から

a. 産経新聞報道「幽玄『静』の祭り浅草寺本尊示現会」2006.3.19

> 「浅草寺本尊示現会」が 18 日、始まった。「三社祭」の“動”に対し、“静”の行事で、集まった参拝客らは、かがり火がたかれる中を静かに本堂の石段を上がる三基の神輿の姿に見入っていた。

記事の内容に関して言えば、「浅草寺本尊示現会」を「静」のイメージとして伝えており、「動」を表す三社祭に対して、浅草寺本尊示現会は対極的に意味づけされていた。

b. 東京新聞報道「浅草神輿一泊外出」2008.3.30

> 東京浅草の浅草神社の本社神輿が、隣の浅草寺で“一泊”するために移動する「本堂堂上げ」が29日、行われた。

従来の三社祭では神輿は浅草寺本堂へは入らなかったのだが、浅草寺本尊示現会が再開されてからは、三基の本社神輿が浅草寺縁起を根拠に本堂へ堂上げされ、内陣で「一泊」するようになった。隣の浅草寺で一泊していることからは、浅草寺と浅草神社との深い関係を見て取ることができるのである。

---

[14] 以下、浅草寺本尊示現会の関連資料は『産経新聞』と『東京新聞』による、2006年から2008年までの報道である。

⑵　現地調査から

浅草での現地調査[15]は2006年から2007年にかけて実施した。同地域における「浅草寺本尊示現会」の意味づけ、事前準備の内容と、参加者である氏子たちの考えについて、浅草寺、浅草神社とその氏子、そして観客に対して聞き取りを実施した。得られた回答からは、この新たな行事から各々が影響を受けていることが分かる。

a. 浅草寺教化部役員のS氏

浅草寺は「浅草寺本尊示現会」に協賛し、法要の手配を執行した。示現の意味について、浅草寺側のS氏は以下のように語った。

> この示現会の「示現」というのは、神仏が人々を救うために、様々な姿でこの世に現れること です。浅草寺の本尊の聖観世音菩薩が628年3月18日に示現されたことから、それを祝って、毎年3月には「本尊示現会」という法要を行います。しかし浅草神社とともに行っている「堂上げ」・「堂下げ」の行事は年によって日にちがちょっと違います。

b. 浅草神社禰宜のN氏

浅草神社側のN氏によれば、この新たな行事は重要な意味を持っている。浅草寺本尊示現会と三社祭との関係について、次のように語った。

> 浅草寺の僧侶らによる読経と浅草神社の宮司による祝詞奏上から見られる通り、このように仏事と神事を同時に行うこの行事は全国的にも珍しくて、特に神仏分離以前の観音祭とも呼ばれていた三社祭を一部再現して、毎年5月の例大祭三社祭の序幕となっていると考えています。

こうした浅草寺側と浅草神社側の発言を考えると、浅草寺側は観世音菩薩示現の意味を

15　この部分を補足すると、漁師の檜前濱成・竹成の二兄弟が観世音菩薩の像を発見したこと、そして土師真仲知が自ら出家し、屋敷を寺に改めて観世音菩薩の像を安置し深く帰依したことから、観音様と三社様の間には深い絆があるということを意味している。

強調しているが、神輿の堂上げと堂下げの行事については重視していないようである。むしろ浅草寺側よりも浅草神社側が示現会の意味をより深く受け止め、「新たな神仏の関係」を築きたいと考えていることが分かる。

c. 浅草神社に所属する町会青年部氏子のM氏

浅草寺本尊示現会はそもそも浅草地域の住民たちが「復活」させた行事である。神社の氏子であり、参加者でもあるM氏はこう述べる。

> 浅草寺本尊示現会、今年で8年目ですが、これは「神事」です。浅草に在住する私たち氏子にとって、この行事は浅草の歴史を遡って古くからの観音様と三社様の間の切っても切れない深い絆を表す行事ですよ[16]。三社様が神輿に乗って観音本堂に上がって一泊することを通して、観音様と三社様とはお互いに出会え、きっといろいろと話し合ってますよ。

d. 観客T氏とF氏

浅草寺には国内外から参詣や観光のために一年中多くの人々が訪れ、毎月のように多種多様な行事が行われている。浅草に来る観光客は主に浅草寺に参拝し、境内や周辺に林立する屋台や飲食店や施設で食事や散策をし、「伝統的な日本」の雰囲気を味わう。T氏とF氏は浅草を訪問した観光客である。

T氏（女性、40歳代）は浅草寺本尊示現会について、以下のように述べた。

> 埼玉県からやって来ました。今日は友達3人と一緒に浅草で観光して、偶然にこういう行事を見られたのはとってもラッキーでしたよ。夜の神輿はすごくきれいですよね。ちなみに、この行事はなんと言うのですか？

[16] この部分を補足すると、漁師の檜前濱成・竹成の二兄弟が観世音菩薩の像を発見したこと、そして土師真仲知が自ら出家し、屋敷を寺に改めて観世音菩薩の像を安置し深く帰依したことから、観音様と三社様の間には深い絆があるということを意味している。

またF氏（女性、30歳代）は次のように語った。

今日は家族と参りに来ました。東京に住んでいて、たまたま上野や浅草の近辺に散策しに来たのです。浅草の三社祭は聞いたことがありますが、今日の行事は知りませんでした。でも、普段は見られない神輿を間近で、しかも触れるのがうれしいです。

以上のように、神輿を担ぐ氏子は、観音様と三社様は古くから浅草の土地を守る神であり、示現会を神仏に関わる「神事」だと考えている。かつ、浅草寺本尊示現会が新しく構築された行事であることも明確に認識している。しかし、示現会を「神事」として重視している氏子たちとは対照的に、観光客と参拝者たちは、その詳しい内容や意味を知っているわけではないということも分かる。

(3)　2000-2009年の浅草寺本尊示現会日程

次の表3は、この10年間の浅草寺本尊示現会の内容である。先述の通り、2000 （ 平成12）年に「復活」され、2009（平成21）年で10年目を迎えた。

表3　2000年から2009年にかけての浅草寺本尊示現会の内容[17]

日にち	曜日	回数	行事内容
2000年（平成12）3.17―3.18	金、土	1	法要、「堂上げ」・「堂下げ」
2001年（平成13）3.17―3.18	土、日	2	法要、「堂上げ」・「堂下げ」
2002年（平成14）3.30―3.31	土、日	3	法要は18日に行われた。 「堂上げ」・「堂下げ」
2003年（平成15）3.15―3.16	土、日	4	法要は18日に行われた。 江戸開府400年を記念し、「古式三社巡行」が行われた。
2004年（平成16）3.27―3.28	土、日	5	法要は18日に行われた。 28日新装なった駒形堂まで渡御した。

[17] 浅草観光連盟（1997）に基づき、制作した。

2005年（平成17）3.27―3.28	土、日	6	法要は18日に行われた。 「堂上げ」・「堂下げ」
2006年（平成18）3.18―3.19	土、日	7	法要、「堂上げ」・「堂下げ」
2007年（平成19）3.24―3.25	土、日	8	法要は18日に行われた。 「堂上げ」・「堂下げ」
2008年（平成20）3.29―3.30	土、日	9	法要は18日に行われた。 「堂上げ」・「堂下げ」
2009年（平成21）3.17―3.18	火、水	10	法要。浅草寺本堂屋根瓦修繕のため、「堂上げ」・「堂下げ」は行われなかった。三社様の御神霊を唐櫃に入れ、浅草寺本堂に一晩安置された。

地元の人々は、江戸時代の観音祭から現代の三社祭となった示現会を再び本来の姿に戻そうと考えているようである。もともと「示現」という語が意味するのは「3月18日に観音観世音菩薩が現れた」ということなのだが、この10年間の日程を見ると、示現会が3月18日に行なわれているのは4回だけである。他の6回は、選挙の日と重なったり、交通事情等の影響を受けたりしたために、3月18日に行なうことはできなかった。

10年という時間は、浅草の他の行事の歴史と比べると、はるかに短い。地元の人々は「本来の意味」を今まさに創り上げようとしている。浅草寺本尊示現会は現在も再構築中の行事であるといえるだろう。

5. おわりに―「新･神仏習合関係」へ向けて

浅草の住民たちは、明治以降に断絶していた神仏習合の儀礼を浅草寺本尊示現会として「復活」させた。エアハート（1997）によれば、日本の宗教は一般的に、神道や仏教といった多くの個別の伝統が、一つの聖なる道に包含されており、しかも祭りや儀式は行われるたびに再創造されていることが特徴であるという。

浅草寺と浅草神社は明治初期の神仏分離令によって切り離されたが、住民たちは浅草地域の更なる発展を目指し、本尊示現会の仏教行事を古式三社祭舟渡御の一部として3月18

日に再開し、新･神仏習合儀式を創造した。今回、浅草寺と浅草神社が「示現会」を行い始めたことから、新しい神仏習合のあり方が見て取れる。つまり、この浅草寺本尊示現会の最大の特徴は、浅草寺と浅草神社が協賛し、地元の奉賛会団体が中心となって行っているという点、言い換えると、浅草のさらなる繁栄のために、宗教界と住民たちが一体となったという点である。

浅草寺本尊示現会が「再開」されたことで、浅草寺と浅草神社は新しい動きをみせた。浅草寺側はこれを観世音菩薩の示現を祝う行事と考え、一方、浅草神社側は仏事と神事を同時に行うという点でこの行事を全国的にも珍しいものとして捉えた。さらに浅草寺本尊示現会の「再開」は、2012（平成24）年に予定されている三社祭700年祭に向けた準備段階とも位置づけられている。

しかし、再開されてからの10年間を振り返って見ると、行事の日程や内容が流動的で、いくつかの事情のために年ごとに変更を余儀なくされ続けていることが分かる。また観光客らの認知度が十分でないことから、アピールが不足し、いまだこの行事が定着しているとはいえない状態であることも明らかである。それらには、この新しい行事の担い手である浅草寺側と神社の氏子たちの思惑がそれぞれ微妙に異なっていることも影響していよう。

この「浅草寺本尊示現会」の事例からさらに考えられることは、浅草寺と浅草神社側にとって、宗教行事として行われる示現会が観世音菩薩と三社様との深い絆を表しているのではないかということである。浅草寺はこれから浅草神社とともに新･神仏習合儀式の創造への道へ歩き出そうとしている。

本研究は、浅草寺本尊示現会という新･神仏習合行事の成立に着目し、浅草寺と浅草神社の両宗教施設がともに儀式を変更し再創造していく経緯を明らかにした。この催しが始められて10年が経過し、いまだ再構築の途上にあるものの、浅草寺と浅草神社とが共に新しい神仏習合儀式の再創造へと歩み出しことも事実である。浅草寺と浅草神社との「新･神仏習合」のあり方が2012年の700年祭記念行事へ向けてどうのように変化していくかについて、今後も引き続き注目し続ける必要があるだろう。

引用文献

網野宥俊

1978 『浅草神社の今昔』東京：浅草観光連盟。

1982 『浅草寺史談抄』東京：浅草寺。

網野義紘

1995 「浅草寺と浅草神社」『浅草寺』430号 東京：浅草寺。

浅草寺

1996 『図説浅草寺―今むかし』東京：浅草寺。

浅草神社奉賛会

2007 『浅草寺本尊示現会実施要項』東京：浅草神社奉賛会。

浅草観光連盟

1997 『浅草繁栄の道』東京：浅草観光連盟。

2006 『三社祭』栞 東京：浅草観光連盟。

梅堂国政

1883 『絵本第3冊三社乃由来観世音霊験花雲浅草詣』東京：松延堂。

小森隆吉

1978 『台東区の歴史』東京：名著出版。

陣内秀信

1991 「迷宮空間としての盛り場」『国立歴史民俗博物館研究報告』33:1-23。

堀切直人

2005 『浅草 江戸明治篇』東京：右文書院。

竹内誠

2000 『江戸の盛り場･考―浅草･両国の聖と俗』東京：教育出版株式会社。

長島憲子

1998 『近世浅草寺の経済構造』東京：岩田書院。

比留間尚

1980 『江戸の開帳』東京：吉川弘文館。

エアハート、H・B
　1997　『日本宗教の世界』大阪：朱鷺書房。
斎藤月岑
　1838　『東京歳事記巻之2』東京：須原屋。
産経新聞
　2006　「幽玄『静』の祭り浅草寺本尊示現会」『産経新聞』2006年3月19日。
東京新聞
　2008　「浅草神輿一泊外出」『東京新聞』2008年3月30日。

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange10:22-41(2011)

研究ノート

主婦が結ぶ縁
―ママさんブラスでつながる女性たち

中嶋 朋哉

1. はじめに

本稿の目的は仙台市内で活動する主婦[1]のための吹奏楽サークルを対象とし、その活動内容やメンバーの参加動機を記述・分析することによって、妻であり母である主婦たちがそこに集う理由を明らかにし、彼女たちが結ぶ縁の特質を考察することである。

日本人の人間関係を表す言葉に「縁」というものがある。人類学や社会学といった社会科学分野では、人々が生み出す複雑で多様な社会を整理・分類し理解するために、縁とその縁により構成される集団について多くの研究を重ねてきた。

例えば「親子や兄弟姉妹を中心とした血のつながりを基礎とする血縁関係、同じ空間を共有しながら生活を営むことを基礎とする地縁関係」（竹中 2010：132）は、古くから人類学者が関心を寄せてきた人間関係の基礎である。米山（1981）はこの血縁・地縁といった選択不可能な縁とは別に、一般に開かれた任意参加可能な組織について言及し、こうした人為的な人間関係を「社縁」と呼んでいる。主要産業が第一次産業から第二次・第三次産業に移行した 1960 年代以降、血縁・地縁による伝統的な集団は機能的に著しく衰退し、代わりに社縁が日本人に果たす役割が増大していった（井上 1987：244）。

その後、この社縁という概念に含まれる広範な人間関係に着目し、より詳細に分類する動きが広まった。上野（1987：226-227）は「『社縁』という概念は、血縁・地縁以外のありとあらゆる人間関係を放り込む『カテゴリーのゴミ捨て場』になっている」と述べたうえで、社縁は一度加入してしまうと自由に脱退できない拘束性を持つ関係であるとも指摘している。さらに上野（1987）は、この社縁の中に、互いが互いを選び合い、加入・脱退

[1] 本稿における主婦の定義は、「性別役割分業に基づく役割として家事・育児・介護などの生命再生産活動を無報酬で担うことを自明視された女性」という国広（2004：4）の記述に従う。

が自由で拘束性のない「選択縁」が出現していると言及する。選択縁は「血縁・地縁以外の人為的な人間関係」という枠組みの中では社縁の一部と捉えることもできるが、「選べる縁・選べない縁」という観点からは第四のカテゴリーと捉えることができるだろう。

上野（2008）[2]はこの選択縁の集団が男性よりも女性、とりわけ専業主婦の間でいち早く誕生していると考えて、女性の選択縁を特に「女縁」と呼び、1980 年代後半の時点で活動していた女縁集団を研究している。そしてその中で、この女縁集団の活動が主婦役割を逸脱しない範囲内で行われていること、しかしその反面、女縁集団において主婦たちは誰かの妻・母ではなく一個人として活動していると主張している（上野 2008）。具体的には「夫や子どものことをしゃべるのはかえってタブーである。『自分の名前で出ています』－女が妻でも母でもなく“個人”になれる場所、それが選択縁の集団である」（上野 2008：11）という指摘である。

こうした上野の議論を踏まえたうえで、私はママさんブラスという主婦のサークルを対象として、これを女縁集団と捉えたとき、果たしてメンバーたちが妻・母ではなく一個人として活動しているのかどうかを検討したい。なお、本稿は主に私が 2008 年 7 月から 2010 年 12 月までに行なったフィールドワークによる一次資料に基づいている。フィールドワークでは、仙台市内で活動するママさんブラスA（以下、A）の活動における参与観察と参加者数名への集中的なインタビューを行った。その他、調査対象としたAのホームページ[3]やその他の参考文献による情報を利用した。また、本稿における団体名・個人名はプライバシー保護の観点からアルファベットにより表記した。

2.　ママさんブラスとは

ここでは本稿の民族誌的背景としてママさんブラスサークルの概要について述べ、ママさんブラスがどのような経緯で発足し、どのような特徴を持ち、どのような活動を行なっ

[2] 上野の『「女縁」を生きた女たち』（2008）は、1987 年に彼女が電通ネットワーク研究会と共同して著した『「女縁」が世の中を変える - 脱専業主婦のネットワーキング』を第 I 部とし、第Ⅱ部・第Ⅲ部を書き下ろしたものである。本稿では第 I 部にある 1987 年時点に関する部分を引用している。

[3] A ホームページに関するアドレス等の出典は、団体の情報保護の観点から記載しないこととした。

ているのかを詳細に記述する。

(1) ママさんブラス発足の経緯

ママさんブラスという主婦のための吹奏楽サークルは、2002 年に全国で初めて仙台市内で発足した。発足の経緯については、主婦がママさんブラスサークルに参加する動機と深く関係しているため、以下に詳しく記述する。

ママさんブラスの発起人は M さんという女性である。彼女は関東地方で生まれ育ち、東京都内の企業に就職した。職場で現在の夫と結婚し、その後夫の勤務先の都合により仙台に移り住むことになった。転居に伴い彼女は退職し、専業主婦として家庭内の仕事をしながら、仙台市内にある社会人向けの吹奏楽団体に所属していた。学生時代は吹奏楽部に所属していたため、結婚した後も楽器の演奏は続けたいと考えていたためである。

一人目の子どもが生まれた後は、子どもを連れて練習に参加していた。しかし二人目の子どもが生まれた後、手のかかる幼い子ども 2 人を抱えて練習に参加することが難しくなった。練習中に M さんが子どもから目を離せない様子が目に余り、当時所属していた団体に「子連れの練習参加禁止」という規則ができてしまったのである。こうして M さんはあえなくこの団体を退団することになった。当時を振り返り M さんは「ずっと続けてきた楽器が続けられなくなっちゃって、どうしようかと目の前が真っ暗になっちゃった」と話した。また M さんは、社会人向け吹奏楽団体の多くが子どもを連れて練習に参加するメンバーのことを想定していないため、自分と同じように子どもが生まれたことを理由に退団していく女性を何人も目にしたという。

所属していた吹奏楽団を退団した後、Mさんは近隣の児童館でアンサンブル演奏[4]を子どもに聞かせていたという。同時にこの頃からMさんは「子どもを連れて参加できる吹奏楽サークルがあれば」と考え、ママさんブラスサークルの構想を描き始めていた。

その後、インターネットで子どもと一緒に参加できる吹奏楽団を探していると、ある団体のサイトの掲示板で、自分と同じ悩みを抱える女性の書き込みが目に留まった。この女性が後に M さんと共にママさんブラスを発足することになる O さんである。この掲示板の書き込みを通じて二人は情報を交換するようになり、M さんと O さんは個人的に連絡

[4] 少人数による室内楽演奏のこと。

を取り合う間柄になった。そんな折、M さんが以前から構想していたママさんブラスのアイデアを O さんに話すと、O さんは乗り気になり、二人で発足に向けて準備をしていくことになった。O さんは元々パソコンやインターネットに詳しかったため、メンバー募集やホームページの立ち上げ等は O さんが担当した。会場の確保や楽譜の手配は M さんが受け持ち、団の規約も M さんが取り決めた。

参加者の募集をするとすぐに 20 名程のメンバーが集まり、2002 年 11 月には第 1 回の活動を行った。発足当初は現在の活動とは異なり、単にメンバーが集まって合奏するだけであった。それでも主婦である自分たちがまた楽器を演奏できる場を自分たち自身で作れたことが嬉しかったと M さんは話す。

こうしてママさんブラス A が発足した。仙台において A ができた後、全国でも同様の団体が相次いで発足し、2010 年現在でその数は 60 を数えるまでになった。主婦である女性たちにとって、家事や育児と吹奏楽を両立できる環境が求められていたということであろう。子どもと一緒に参加できるというのがママさんブラス最大の特徴であり、ママさんブラスが広まった要因でもあると考えられるのである。

⑵　ママさんブラスの特徴

仙台で誕生したママさんブラスはこの 9 年間で急速に全国へと広がっていった。「子どもを連れて参加できる吹奏楽サークルを作りたい」という思いからママさんブラスができたこともあり、ほとんどの後発団体も子どもと母親が一緒に参加できることを特徴としている。そのためママさんブラスには吹奏楽サークルでありながら、母親たちが共に子育てをする育児サークルとしての性格もある。この点が他の主婦サークルとの大きな違いであるといえる。

全国に存在するママさんブラスの活動内容は多岐に渡っている。しかし、多くの団体に共通するのは、①週に 1、2 回程度活動していること、②活動場所は市民センターや公民館といった各地域の公共施設であること、③複数人が集まって合奏練習やアンサンブルを行なっているという点である。

活動の曜日については平日に設定している団体が多い。これは夫や子どもが家にいる土日はなかなか気軽に外へ出ることができないという、主婦の事情が関係していると考えられる。主婦にとっては家族が家にいる時間こそが「仕事」をする時間なのである。ママさ

んブラスのメンバーには幼稚園や小学校に通う子どもの母親が多い。そのため活動時間についても、大半の団体では子どもの帰宅時間までには帰れるようにと午前中から昼ぐらいまでをあてている。朝のうちにひと通りの家事を終え、ママさんブラスで楽器を吹き、夕飯の買い物をしてから家に帰って子どもを迎えるという日程で１日を過ごすメンバーが多いのではないだろうか。ママさんブラスが主婦・母親を対象としたサークルであることから、活動の曜日や時間がこのように定められていると考えられる。

その一方で、主な活動を平日に設定しながら、土曜や日曜にも活動している団体が半数以上ある。こうした団体のホームページには、専業主婦だけでなく兼業主婦も参加できるように土日の練習を取り入れていることが明記されている場合もある。

活動場所については各地域の市民センターや公民館といった公共施設がほとんどである。これは比較的安く会場を借りることができ、交通の便もよいという点から選ばれている。ただし、防犯上の理由からホームページ上に活動場所を記載していない団体も多いため、その団体に入団したいと考える人はメンバーと個別に連絡を取る必要がある。また、サークル内部の情報もこのホームページを通じてメンバーの間でのみ共有されているようである。

活動内容については団体ごとに特色があり、コンサートの開催を目標に練習している団体もあれば、幼稚園や保育所等への訪問演奏を主な活動としている団体もある。日中に活動しているママさんブラスだからこそできる訪問演奏活動は比較的多くの団体で行われており、自分たちの活動を地域へ還元しようとする意識がうかがえる。

3. Ａについて

ここではＡの特徴と集団の構成について記述する。Ａがいつどんな場所で活動しているのか、またどのような人々がＡの活動に参加しているのかを記述することで、ママさんブラスサークルの具体的な一事例を提示したい。

(1) Ａのプロフィール

私が研究対象としたＡは、「子育て中のママたちによる、子育て中のママたちのための、吹奏楽を特徴とした育児サークル」をコンセプトとして、主に仙台市内で毎週木曜日と月

に１度土曜日に活動している。またこの活動のほかに地域の保育所、幼稚園、児童館、市民センター、小学校、老人ホーム等への訪問演奏も行っている。この訪問演奏は月に３回程度を目安に行っているが、各団体から多くの依頼があるため、場合によっては月に5、6件の演奏依頼を引き受けることもある。

Ａでは入会・退会が頻繁にあるため正確な人数は把握されていないが、パートのメンバー数から見ると、所属しているメンバーは100名を超える。ママさんブラスとしては規模が大きいサークルである。メンバーは同種の楽器で構成される「パート」を最小単位として活動している。パートのメンバー数を木曜日の活動に参加する「通常会員」と土曜日の活動に参加する「土曜会員」に分けてまとめたものが以下の表である。

表１：Ａのパート構成

パート	通常会員	土曜日会員	パート合計人数
フルート	8名	12名	20名
オーボエ	0名	3名	3名
クラリネット	16名	6名	22名
サックス	11名	10名	21名
ホルン	6名	4名	10名
トランペット	6名	1名	7名
トロンボーン	3名	3名	6名
ユーフォニウム	3名	2名	5名
チューバ	0名	1名	1名
エレキベース	1名	0名	1名
パーカッション	3名	3名	6名
合計	57名	46名	103名

出所：Ａホームページを基に筆者作成

Aのメンバーは全員が何らかの係にも属しており、団の運営に携わっている。そのため各メンバーはパートと係というふたつの役割を担っているということになる。また、係と共にAの運営に大きく関わるのが「運営委員会」である。係と運営委員会の詳しい役割については後に述べる。

練習は仙台市内の市民センターで午前10時から午後1時までの間に行われる。メンバーによれば、市民センターであれば3時間利用しても5,000円前後で借りることができるという経済的な理由と、地下鉄沿線にあるという交通の便のよさが会場選択の理由として挙げられるという。また、活動時間を午前10時から午後1時までに設定しているのは、幼稚園や小学校に子どもを送り出した後で練習に向かうことができ、なおかつ子どもが帰ってくる時間に帰宅できるためであるということであった。

参加するメンバーは概ね20歳代から40歳代の女性で、全員が結婚し子どもがいる主婦である。年齢によって異なるが、多くのメンバーには3歳以下から小学生までの子どもがいる。全国のママさんブラスがそうであるように、Aにも子どもを連れて練習に参加できるため、まだ幼稚園に通うような年齢に達していない子どもも気兼ねなく連れてくることができる。木曜日の練習に参加するのは、母親が20～30名、未就園児の子どもが10名前後であり、一方、土曜日の練習には10名前後のメンバーと、小学生も含めた10名前後の子どもが参加する。

Aのメンバーは「通常会員」と「土曜会員」に分けられる。通常会員は主に木曜日の活動に参加する人たちで、土曜会員は主に土曜の活動に参加する人たちである。それぞれのメンバーは通常会員として所属するか土曜会員として所属するかを選択し、それに応じて会費を支払う。通常会員は3ヶ月で2,000円、土曜会員は土曜の活動に参加する度に200円支払う。通常会員が土曜日の活動に参加した場合は、1回参加するごとに100円支払う。逆に土曜会員が木曜の活動に参加する場合は、1回参加するごとに200円支払う。両者は排他的な関係にはなく、メンバーはどちらの練習にも自由に参加できる。また、通常会員・土曜会員のいずれも、入会金として300円を支払う。入会金は名札や集金袋、「キッズカード」と呼ばれる子どもの参加を確認するカード、資料等のコピー代として使われる。通常会員の会費は4・7・10・1月に、3ヶ月分をまとめて支払う。

その他、特徴的なことがらとして、訪問演奏や自主コンサート等の際に、メンバーはユニフォームであるAオリジナルのエプロンを付けることが挙げられる。このエプロンは1

枚 1,700 円で、入会係が発注や在庫の管理を担当しており、必要になった時にメンバーが各自で購入する。

⑵　A の係と運営委員会

ここではAの運営に欠かすことのできない係と運営委員会について記述する。通常会員のメンバーは基本的に全員が何らかの係を担当することになり、互いに協力して運営に取り組んでいる。また、Aを立ち上げたMさんは「隊長[5]」という特別な立場にあり、運営委員会を含めたA全体のサポートをしている。

Aの係はパートリーダー、キッズ係、渉外係、演出係、入会係、指揮・選曲係、パート譜面係、パート会計係、日記係という 9 つの係から構成され、その上位組織として運営委員会が置かれている。それぞれの係には、フルート・オーボエ、クラリネット、サックス、ホルン、トランペット、低音(トロンボーン・ユーフォニウム)・パーカッションという 6 つのパートから各 1 名ずつ選出される[6]。これらの係は年度末に行われる総会で決める。任期は 1 年から 2 年であるが固定的なものではなく、メンバーの話し合いによって変更されることもある。夫の転勤に伴って退会する人も多いため、係のメンバーの入れ替わりには柔軟に対応しているのである。

運営委員会は、パートリーダー、キッズ係、渉外係、演出係、入会係、指揮・選曲係、そしてキッズ見守り隊と呼ばれる託児の係それぞれの代表者に、運営委員長 1 名、運営副委員長 2 名、本会計 1 名、書記 1 名を加えたメンバーで構成される。以下、特徴的な係と運営委員が果たす役割について記述する。

キッズ係は、活動中に子どもたちが遊ぶためのおもちゃや、キッズ楽器（後述）を持ち帰るパートを決める。また、絵本の読み聞かせ等を通じて母親と子どもが触れ合うための「キッズタイム」という企画の当番も決める。おもちゃとキッズ楽器の持ち帰り、キッズタイムの担当はパートごとに交代制で持ち回る。メンバーと一緒に参加する子どものための企画やそれに伴う準備等は、主にこのキッズ係が担当している。

---

[5] M さんは A の間では「言いだしっぺ」という呼ばれ方をすることがある。これは M さん自身で決めた呼称である。

[6] 2010 年度は、オーボエパートの人数が少ないため、フルートパートと合わせて 1 パートとされており、同じ理由から低音パートとパーカッションパートも合わせて 1 パートとされている。

渉外係は、訪問演奏の依頼者側と打ち合わせたり、訪問演奏に関連する係のメンバーと話し合ったりしながら、その企画と実施に携わる係である。そうした場面での詳細や役割については、後に訪問演奏の項で触れる。

演出係は、訪問演奏での司会を担当する。また司会用の台本や小物（訪問演奏で子どもたちを盛り上げるために使う小道具）の作成等も行う。訪問演奏に際して、渉外係との打ち合わせを繰り返しながら演出方法を考えていく係である。

日記係は、活動内容を日記に書き、日記係のリーダーに提出する係である。原則として各パートに1名の日記係がいる。日記係のリーダーは、担当パートの日記係から送られた日記をホームページ上に掲載する。土曜日の活動の日記係は、毎回掲示板上で募集して決める。

その他の係として、2007年に設けられた「キッズ見守り隊」（以下、見守り隊）がある。見守り隊は、練習中にキッズスペースで子どもたちの託児を担当する係である。見守り隊のメンバーは、他の係のように各パートから選出されるのではなく、有志によって構成される。見守り隊のリーダーは、練習に先立ってその日の練習を休む見守り隊のメンバーを掲示板上で把握し、参加予定のメンバーの中から4名ほどの当番を決定する。当番になったメンバーは20分交代で託児を行ない、子どもと一緒に遊んだり、泣き出してしまった子どもを母親の元へ連れて行ったりする。交代制を採用しているのは、託児を担当している時間は練習に参加することができないためである。現在は託児を専門に行なう「サポート隊」が1名おり、さらにホームページ上で継続して募集を行っている。

運営委員長は、Aの代表として活動全体を取りまとめる。木曜日の活動の進行や合奏練習時の指揮、掲示板上でのメンバーへの連絡、運営委員の統括、運営委員によるミーティングの実施などを含め、Aの活動全般が円滑に進むために必要不可欠な役割を担っている。

これらの運営委員や係は、年度末に開催される総会の前にアンケートを配布し、本人の自薦によって決定する。ただし、運営委員長だけは立候補するメンバーが少ないことに加え、Aの活動全般に関わることから、自薦と他薦の両方を認めている。

4. Aの活動

ここではAの活動を（1）木曜日の活動、（2）土曜日の活動、（3）訪問演奏、（4）ファ

ミリーコンサートに分類し、A が具体的にどのような活動を行なっているのかを記述する。特に木曜日と土曜日では活動にどのような差異があるのかを明確にすることで、それぞれのメンバーが A に参加する動機を分類する際の指標にしたい。

(1)　木曜日の活動

木曜日の活動は午前 10 時から始まる。練習会場の開錠は運営委員が交代で受け持つことになっており、まずその日の当番の運営委員が市民センターの事務室から練習会場の鍵とマイク、スピーカーを借りてくる。マイクとスピーカーは運営委員長等が活動を進行する際に使用する。

午前 10 時の段階で集まっているメンバーは数名であるため、すぐに練習が始まるわけではない。開場すると到着しているメンバーでイスを並べるなど、会場設営を行う。同時に、母親が練習している間に子どもたちが遊ぶための「キッズスペース」も設置する。キッズスペースにはブルーシートをしき、その上にブロックやままごと用のおもちゃを置いた場所である。

その日に参加するメンバーが集まるのはおおよそ 10 時 30 分頃である。毎回の練習には 20 名から 30 名程のメンバーが集まり、その内の約半数が子どもと一緒に参加する。集まったメンバー同士は練習が始まるまで世間話をしたり、楽器のウォーミングアップをしたりしながら過ごす。この時間は母親の声や子どもたちが走り回って遊ぶ音でずいぶんにぎやかになる。

練習が始まる前には「キッズごあいさつ」という時間がある。キッズ係が練習会場内にある小部屋に子どもとその母親を集め、子どもたちの参加確認や母親たちへの注意事項の伝達を行うのである。また、「部屋を走らない」、「おもちゃを投げない」、「友達と仲良く遊ぶ」という A の約束の確認と、「A の歌」という「いとまきの歌」の替え歌を子どもたちで合唱する。

10 時 40 分頃になるとようやく練習が始まる。初めに運営委員長からメンバーへ、当日の練習予定や訪問演奏に関する連絡事項の伝達があり、その後は各楽器の音程を合わせるチューニングを行う。

チューニングが終わると合奏練習が始まる。合奏練習で取り上げる曲は、直近の訪問演奏で演奏予定の曲で、多くは子ども向けの童謡やアニメソングである。この合奏練習がお

よそ 30 分間続く。チューニングや合奏練習中であっても、子どもたちは母親から離れようとしなかったり、遊んでいる最中のふとした拍子に泣き出してしまったりするために、母親たちは常に子どもに気を配っていなければならない。見守り隊で対処しきれないこともあり、子どもをあやすために練習を中断して子どもの元に向かうメンバーの姿もたびたび見かける。

11 時 10 分頃になると休憩に入る。休憩中も練習をする人、係の連絡を取り合う人、世間話をする人とさまざまである。この休憩時間は「キッズタイム」という子どもたちのためのレクリエーションの時間でもあり、子どもたちはごあいさつの時間に集まった小部屋に再び集められ、メンバーによる絵本の読み聞かせや手遊び等を楽しむ。キッズタイムを取り仕切る担当はパートごとの持ち回りになっており、担当パートは当日に何をするかを事前に打ち合わせて準備をしてくるのである。

約 15 分の休憩が終わると練習を再開する。前半の練習と同じように訪問演奏のプログラムから 2、3 曲を取り上げて合奏練習を行う。後半の練習は約 40 分間続く。

12 時 10 分頃には合奏練習が終わり、その後は「キッズ合奏」の時間になる。これは母親と子どもが一緒に演奏することを目的とした時間である。子どもたち一人ひとりに鈴やタンバリンといった「キッズ楽器」が配られ、メンバーの合奏に合わせて楽器を叩いて楽しむのである。私がフィールドワークを行った 2009～2010 年の間は「崖の上のポニョ」が頻繁に演奏されていた。その他にもアニメの主題歌等、子どもたちに馴染みのある曲を数多く演奏しており、親子で演奏を楽しんでいる様子がうかがえた。

キッズ合奏が終わるとその日の練習は終了となり、後片付けに入る。キッズスペースを撤去し、イスを元通り会場の隅に積み重ねる。ただし、すべてのメンバーがすぐに帰るわけではなく、直近の訪問演奏に参加する予定のメンバーは練習終了後も会場に残り、少人数での合奏練習を続ける。その他のメンバーはそれぞれ会場を後にする。

すべての活動を終えて完全に会場を撤収するのは午後 1 時である。事務室に連絡して練習会場を確認してもらい、施錠して鍵とスピーカーとマイクを事務室に返却する。練習終了後は市民センター内で子どもにお弁当を食べさせる母親もいれば、幼稚園に通う子どもを迎えに行く母親もいる。

木曜日の活動について注目して欲しいのは、「キッズごあいさつ」、「キッズタイム」、「キッズ合奏」といった子どもたち向けの企画が用意されていることである。そこには母親だ

けでなく子どもにもAの活動を楽しんでもらいたいというメンバーの意志が反映されている。

⑵　土曜日の活動

土曜日の活動も木曜日と同じく午前10時に始まる。土曜日の活動の鍵当番、日記係、集金係等の担当者は、練習の度にAホームページ内の「隊員専用掲示板」で募集する。当日の鍵当番を担当するメンバーが事務室から練習会場の鍵を借りてきて開錠する。

会場が開くとイスを並べ、キッズスペースを準備するのは木曜日の活動と同じであるが、土曜日の特徴は、会場に到着するとすぐに楽器を出してウォーミングアップを始める人が多く、メンバー同士で世間話をしている姿はあまり見かけないということである。土曜日の活動に参加するメンバーは、平日に仕事をしている人、仕事はしていないが木曜日ではなく土曜日に参加する人、木曜日の活動にも参加するがこちらの練習にも参加する人とさまざまである。人数は10名から20名程で木曜日よりも少ない。

母親と共に参加する子どもは、幼稚園児や小学生など、木曜日の活動に参加する子どもよりも年上の子が多い。年齢の近い子同士が遊んでいたり、年上の子が年下の子の世話をしていたりする姿も見受けられる。また携帯ゲーム機を持参して遊ぶ子どもが多く、木曜日と比べてキッズスペースでブロックやままごとのおもちゃで遊ぶ子どもは少ない。毎回10名程度の子どもが参加するため、半数以上のメンバーが子どもと一緒に参加していることになる。

土曜日の活動ではキッズごあいさつの時間がなく、メンバーが集まるとチューニングが始まる。これがおよそ10時30頃で、土曜日の活動の進行をするのはほとんどMさんである。当日の練習予定や連絡事項の伝達、合奏練習の指揮などはほぼすべてMさんが行い、練習を進めていく。

木曜日よりも人数が少ないためチューニングは比較的早く終わり、そのまま合奏練習に入る。練習する曲目はやはり直近の訪問演奏で演奏予定の曲である。ただし、訪問演奏の多くは平日に行われるため、土曜日の活動に参加するメンバーの大半はこの訪問演奏には参加しない。

土曜日の活動は正午には終わる。合奏練習が始まって活動を終えるまでの約1時間半は、数分間の休憩を挟むこともあるが、ほとんど休まず練習を続ける。ここに土曜日の活動の

特徴が表れている。木曜日の活動とは違い、メンバーは楽器を演奏することに専念し、途中でキッズタイムやキッズ合奏といった子どものための企画を挟むことなく、時間一杯練習しているのである。

練習が終わると会場の片付けに入る。イスやキッズスペースの片付けを手伝う子どももいて、迅速に会場の撤収が行われる。片付けが終わり会場の施錠を終えるとその日の活動はすべて終了となる。練習後は世間話をしているメンバーの姿もたびたび見かけた。木曜日の活動よりも練習時間が短く、休憩時間もほとんどないため、練習後にメンバー同士でコミュニケーションを図っているのだと考えられる。

以上、土曜日の活動に注目すると、木曜日の活動とは方針が異なっていることが分かる。土曜日の活動でほぼ休みなく練習を続けるのはＭさんの方針である。彼女は「土曜日の練習は月に１度しかないから、土曜日のメンバーには『楽器を吹き疲れる感覚』を味わって帰って欲しい」と話す。子どもたちは子どもたちだけで自由に遊び、母親たちは練習に専念する。キッズタイムやキッズ合奏といった子どもたちのための企画は設けられていない。

また、土曜日はメンバーの夫の仕事が休みの場合があり、子どもの世話を夫に任せて練習に参加することができる。平日にも参加可能だが、あえて土曜日に参加しているメンバーは、「土曜日なら子どもを旦那に預けて演奏に専念できるじゃないですか。子どもと一緒だとどうしても集中できないから」と話していた。子どもを連れて参加できるのがＡの最大の利点ではあるが、練習に専念するためにあえて一人で参加できる土曜日に来るメンバーもいる。こうしたことから、土曜日の活動には「メンバーが集中して演奏に取り組む」という基本方針があり、子どものための企画に時間を取っている木曜日の活動とは異なっているといえる。

⑶　訪問演奏

木曜日・土曜日の練習に加えてＡの活動の主軸となっているのが訪問演奏活動である。訪問演奏は、幼稚園や保育所、児童館、小学校、市民センター、老人ホームへメンバーが足を運び演奏する活動である。依頼者はＡホームページから演奏依頼をすることができる。Ａでは月に３回程度を目安に依頼を引き受けることにしており、数ヶ月先まで訪問演奏の予定が決まっている。以下では訪問演奏の引き受けから当日までの段取りと、私が参加した訪問演奏当日のスケジュールについて記述する。

訪問演奏の依頼は運営委員会の話し合いで引き受けるかどうかを判断する。訪問演奏の実施が決まった場合は渉外係が依頼主との打ち合わせに入り、その訪問演奏は誰を対象としたものなのか、どれぐらいの規模を希望しているのか、駐車可能なスペースはどれくらいあるのか、演奏する場所や控え室がどこなのか等を入念に確認する。

引き受けた訪問演奏の概要が分かると、次に団内の調整に入る。渉外係はどのパートから何名のメンバーが参加できるのか、指揮と司会・進行を誰が担当するか、どのような演出をするか等を各係の担当者やそのリーダーと連絡を取り合って決めていく。訪問演奏参加者への連絡は、各練習日に渉外担当者が行う。訪問演奏の詳細な情報は、渉外担当者がレジュメを作成してメンバーと共有する。

ここでは私が2009年2月に参加した仙台市内の幼稚園への訪問演奏について記述する。当日は9時30分に現地集合であった。会場へは自家用車や近所のメンバーとの相乗りでやってくる。訪問演奏は大半が午前中に行われるため、午前9時半頃には会場に到着して準備や打ち合わせを行うのである。

会場に着くとメンバーはまず、Aオリジナルのエプロンを身につけ、控え室で各自ウォーミングアップをしたり、演奏会場の準備をしたりしていた。子どもと一緒に参加するメンバーは自分の子どもの世話と演奏の準備を並行して行う。その後、渉外担当者から当日のスケジュールに関する確認があり、演奏予定の曲の中から必要と思われる部分を抜き出して合奏練習を行った。普段の練習とは違って観客に聴かせることを意識しているためか、メンバーも緊張感を持って練習していた。

演奏会場に入ると、園児とその保護者が聴衆として待っていた。まず園長から挨拶があり、続いて10時40分頃から演奏が始まった。その後はAのメンバーの一人が司会者を担当した。

演奏中は事前に準備していたぬいぐるみやパネルといった小物で演出し、子どもたちに楽しんでもらえるような工夫をしていた。生の吹奏楽演奏や演出によって、観客である子どもたちも大いに喜んでいた。また、メンバーの子どもも会場内にある託児スペースで観客と一緒になって演奏を楽しんでいた。この託児スペースには必ず託児係が置かれる。参加メンバーから選出する場合もあるが、あらかじめ主催者側が用意している場合もある。

全体の演奏は11時30分頃に終わり、その後メンバーは再び控え室に戻って楽器や会場の片付けを行った。演奏が終わった後はメンバー同士で世間話をしたり、主催者側から振

る舞われた茶菓子等の差し入れで一息ついたりした。渉外担当のメンバーから「お疲れ様でした」と挨拶があり、幼稚園から謝礼を受け取ったことが知らされた。基本的に訪問演奏は謝礼を受けずに行うことになっているが、受け取った場合はAの会計に入れる。

昼過ぎには会場を後にし、それぞれが家路に着いた。普段の練習の終了時間よりも早く終わった場合は、メンバー同士近くの飲食店で昼食を取る場合もあり、私自身も一度同席したことがあった。

以上が訪問演奏活動の詳細である。木曜・土曜の練習と共にAの活動の主軸としてこの訪問演奏が行なわれているのは、自分たちの演奏を聴いてもらいたいというメンバーの意志を反映させているためである。ただし、訪問演奏の依頼が常に過剰に寄せられているため、引き受けられない依頼があったり、参加メンバーが限られていたりと問題点もあるようであった。

(4) ファミリーコンサート

Aは木曜・土曜の活動と訪問演奏の他にも、不定期に自主企画のコンサートも開催している。これはメンバーからコンサート要望が挙がった場合に開催するものであり、2006年10月と2008年8月に開催された[7]。コンサート開催の目的は、「日頃からAの活動に理解を示し協力してくれている家族へ感謝の気持ちを伝える」ことである。2008年のコンサートはメンバーの家族のみを対象としていたが、2006年のコンサートは家族以外の人であっても無料で聴くことができた。以下ではこの2006年に開催されたコンサートについて記述する。

演奏曲目には訪問演奏活動で取り上げる頻度の多い曲に加え、このコンサートのために新たに練習した曲が組み込まれる。そのほとんど全てがアニメの主題歌や童謡といった子どもたちに馴染みのある曲である。また、コンサートの中にはぬいぐるみや調理器具を用いた演出も行っており、主婦であるメンバーが子どもたちを喜ばせようと工夫している様子がうかがえる。2006年はコンサート開催までの約9ヶ月間、訪問演奏活動を停止して、コンサートに向けた合奏練習や演出に必要な小道具の作成、打ち合わせ等に専念していたという。

---

[7] 2011年にも開催予定であったが、同年3月に発生した東日本大震災の影響によって開催は無期限延期となっている。

またこのコンサートでは、他の吹奏楽団体とは異なる、ママさんブラスならではの試みがなされた。預かったベビーカー置き場の設置、バスタオルの貸し出し、麦茶の無料配布サービス、キッズスペースの設置、大人用と子ども用両方のプログラム作成等がこれにあたる。吹奏楽団やオーケストラの演奏会には、3 歳以下の子どもの入場制限がある場合も多いが、A の演奏会はむしろ幼い子どもたちを主な聴衆として想定していたのである。

5.　メンバーにとってのA

ここではママさんブラス A に参加するメンバーの動機を、私がインタビューを行ったメンバーの話や練習中に交わされるメンバー同士の会話をもとに記述する。そこからママさんブラスが持つ特徴と、そこに参加する人々の動機にどのような関連があるのかを明らかにしたい。

(1)　家庭からの解放―T さんの場合

ユーフォニウムパートの T さんは、夫と幼稚園に通う子どもと 3 人で暮らす 30 歳代の女性で、A には 2010 年 2 月に入会し、主に木曜日の活動に参加している。出身は新潟県で、中学・高校と吹奏楽部でホルンを演奏していた。結婚を機に夫の勤め先である仙台へ引っ越してきた。当初はフルタイムで働いていたが、出産後に退職した。入会当初は一人で参加していたが、現在は土曜日の練習に子どもを連れて参加している。

T さんは、A が紹介されていたテレビ番組でその存在を知り、また吹奏楽を再開したいと考えたため、A に入会することを決めた。他の A のメンバーの中で夫が楽器店に勤めている人がおり、その人の紹介によって現在の楽器を新古品で購入した。入会することを決めてから、自身の退職金でユーフォニウムを購入したのである。

以前は音楽に関心のなかった夫も、A のコンサートを聴きに来た際には T さんが行っている活動に感動していたという。また、T さんは住んでいる地域の近くにある児童館で演奏ボランティアも行なっており、そこではフルートを吹いているという。フルートは昔購入したものを使っている。

「A に入っていてよかったと感じたのはどんな時か」という質問をすると、「家のことを考えないでいられる時間が貴重ですね。周りに会話する人がいるだけでも違います」とい

う答えが返ってきた。また「専業主婦は簡単に育児ノイローゼになりますよ。うちの母も私の妹の子どもの世話をしてるんですけど、最近ノイローゼ気味なんです」とも話していた。5 年間は専業主婦として家事や育児に専念してきた T さん自身も、A に入会するまでの間は一日中子どもと家にいるばかりでストレスを感じていたという。

T さんにとって A に参加する動機は、「家族以外の人と話をする場が得られる」ためであり、一時的に家庭から解放されることが参加動機のひとつであると考えられる。A には多くの専業主婦が所属しており、彼女たちにとって同年代の女性と話す機会は非常に貴重である。一日中子どもとだけ向き合っている生活はストレスが溜まってしまう。A の活動に参加する間は家庭のことを忘れて自分の趣味に没頭することができるのである。他のメンバーも、「同年代の人と話ができるし、練習も厳しくないから気軽に来られて居心地がいい」と話していた。このことから同世代の女性とのつながりが持てることがメンバーの参加動機のひとつであるといえる。

⑵ 息抜きの場として―H さんの場合

H さんは青森県八戸市出身の女性で、青森県で結婚した夫の転勤によって 5 年ほど前に仙台へ引っ越してきた。現在小学 1 年生になる娘がいる。夫の転勤は東北地方の中だけらしいが、「毎年 3 月になるとドキドキする。今年は何もないのって」と言っていた。A に入ってすでに 4 年ほどになり、土曜日の活動に子どもと一緒に参加している。楽器はバリトンサックスを担当している。

現在 H さんは銀行で窓口業務を担当しており、平日はその仕事の関係で練習に出ることが難しいため、土曜日の活動に参加している。H さんいわく「A は私にとってはデトックスですね。日頃の仕事で溜まったストレスをここで楽器を吹いて発散してるんです」とのことであった。平日に休みが取れることはあまりなく、仮に木曜日に休みが取れた場合でも A の練習には参加せず、普段やれない家事に時間を充てるという。また、「木曜日のメンバーとはほとんど顔を合わせたことないから、お互いに会っても分からないと思う」とも言っていた。

土曜日の活動には H さんのように平日に仕事をしているメンバーが多く参加している。週末は自分の趣味に打ち込みたい兼業主婦のメンバーにとって、学校が休みの土曜日に子どもと一緒に来られることが A への参加動機であるといえる。

⑶　小括

これまで述べられてきたＡへの参加動機を整理する。第一に、ママさんブラスの特徴である「子どもと一緒に参加できる」ことがメンバーにとって最大の利点である。木曜日には未就園児が、土曜日には幼稚園児や小学生が母親と共に参加している。木曜日の活動には「キッズタイム」や「キッズ合奏」といった企画もあるため、親子で楽しむことができるのである。

また、「同世代の主婦とつながりを持ち、自分の趣味である吹奏楽に没頭することでストレスを発散できる」ことも参加動機のひとつである。家庭や職場で溜まったストレスを、Ａで楽器を演奏することで解消しているメンバーは多い。Ａは同世代の主婦たちがおしゃべりと楽器の演奏を楽しむ場でもある。

「子どもと一緒に参加できる」、「主婦同士のつながりが持てる」というメンバーの参加動機は、他の社会人向け吹奏楽団では満たされないであろう。子連れで練習に来ることを想定していない吹奏楽団がほとんどであるからこそママさんブラスが生まれたのである。未婚女性や学生あるいは男性も参加する団体であれば、主婦業や子育てに関する話題を共有するのは難しいだろう。これらこそが主婦サークルであるママさんブラスならではの特色であり、同時にメンバーが集い、活動を続ける動機なのである。

6.　おわりに

最後に、これまで記述してきたＡの活動を一事例として、ママさんブラスの特徴を整理し、冒頭で挙げた上野の女縁論を改めて検討したい。

これまで見てきたように、Ａは母親が子どもと共に参加することを前提としたママさんブラスサークルであり、2002 年に全国で初めて発足した。このＡの発足を皮切りにママさんブラスサークルは各地へ広まり、現在 60 以上の団体が活動している。

このママさんブラスＡは主婦のための吹奏楽サークルであるため、子どもや夫が家にいない午前中から夕方まで活動している。専業主婦だけでなく平日に仕事をしている兼業主婦も参加できるようにと、木曜日のほか土曜日にも活動している。メンバーは木曜日の活動には未就園児を連れて参加し、土曜日の活動には幼稚園児や小学生を連れてくるケースが多い。とりわけ小さな子どもの多い木曜日の活動には、子どもたちも楽しめるような企

画を取り入れている。木曜・土曜の活動に加えて、家族を対象としたファミリーコンサートや、地域の幼稚園・保育所・市民センター等への訪問演奏活動も行なっている。メンバーはこのファミリーコンサートや訪問演奏の際に、主婦の象徴として独自の「エプロン」を着用している。メンバーはほぼ全員が家事や育児を担う主婦である。そのため彼女たちが活動の中で交わす会話も家族、とりわけ子どもの話題であることが多い。専業主婦と兼業主婦が共に活動するママさんブラスにおいては、主婦であることがある種の共通言語のようなものになっていると考えられる。

ここで以上に記述してきたママさんブラスの事例から、上野の女縁論を検討したい。

第一に、ママさんブラスは子どもと一緒に参加することを想定して結成されたサークルである。つまり、子育て中の主婦が、母親として子どもを連れて参加する活動なのである。実際に、練習の場では子どもも楽しめたり、子どもをケアしたりするための工夫がなされている。また、活動中にメンバーが交わす会話の大半は家族に関するものであり、そこでは同じ主婦として、母親としての立場を共有したうえでの交流がなされている。また、訪問演奏やコンサートのような対外的な活動の場において、A のメンバーがエプロンを着用して演奏を行っていることからは、彼女たちが主婦であることを全面に押し出しながら活動していることが明らかだろう。

こうした点から、ママさんブラスには、上野（2008：11）による「女縁は女性が誰かの妻・母ではなく、一個人になれる場である」という見解は当てはまらないことが分かる。女縁には、日常的に主婦役割を担っている女性であるからこそ結ぶことのできる縁も存在するのである。主婦である女性がその生活を家庭内で完結させることなく、好きな活動をエンジョイすることに加えて、同じ境遇にある仲間たちとの交流を楽しむ。これもまた女縁の一つのかたちであり、大きな意義があると言えるだろう。

引用文献

竹中宏子

2010　「集う―人間関係の中で生きる」小林孝広・出口雅敏編『人類学ワークブック―フィールドワークへの誘い』pp.127-148、東京：新泉社。

井上忠司

1987　「社縁の人間関係」栗田靖之編『日本人の人間関係－現代日本文化における伝統と変容』pp.244-259、東京：ドメス出版。

国広陽子

2001　『主婦とジェンダー』東京：尚学社。

上野千鶴子

1987　「選べる縁・選べない縁」　栗田靖之編『日本人の人間関係－現代日本文化における伝統と変容』pp.226-243、東京：ドメス出版。

2008　『「女縁」を生きた女たち』　東京：岩波書店。

米山俊直

1981　『同時代の人類学』　東京：日本放送出版協会。

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange10:42-55(2011)

「文庫」の人類学的研究
―母親の集う場の一考察

成田　梨加

1. はじめに

国会決議により 2010 年が国民読書年と定められるなど、近年は読書に焦点を当てた動きを全国的に見ることができる。文部科学省も学校図書館の整備や図書館振興など、読書に関わる施策に力を入れている。そうした行政の立場から読書環境の充実を図ろうとする動きが活発化する一方で、民間では既に 1960 年代半ば頃から「文庫」運営という形で地域の読書環境の整備に取り組んだ人々がいた。

文庫というと、一般的には書籍そのものやその収集の結果である沢山の書籍を指すことが多い。しかし、ここでの文庫とは、民間の個人やグループが自宅や地域の施設を利用して、主に子どもを対象に図書の閲覧や貸し出し、おはなし会や読み聞かせなどを行う私設の図書館のことを指す。

本研究は、現在も仙台で活動を続ける文庫を対象に、その運営責任者である「世話人」とそこに集う人々がどのように文庫と関わっているのかを明らかにすることを第一の目的とする。

また、私が調査した文庫は、訪れる子ども以外は全て女性で構成されている。それはすなわち、文庫の世話人と、子どもたちと共に文庫を訪れる母親たちであり、彼女達のほとんどが専業主婦である。世話人や文庫に集う母親たちが文庫で織りなす関係は、一見すると上野（2008）のいう「女縁」のようである。しかし、文庫での具体的な活動内容や彼女たちの語りを詳しく検討してみると、文庫活動を通して生まれるつながりを女縁と呼ぶことができるのかという疑問を抱く。そこで、本研究では第二の目的として文庫活動が女縁であるかどうかの検討も行う。

2. 問題の背景

ここでは、本研究の民族誌的背景として文庫の歴史を、理論的背景として上野が言及する女縁とは何かを記述する。

(1) 文庫の歴史

①全国における文庫活動

文庫開設に際し行政に届け出をする必要はない。そのため正式な統計などはとられておらず、いつ頃から文庫が存在したのか、また文庫が全国にどれくらいあるのかなどを正確に把握することはできない。その為、調査者によって文庫数や歴史など文庫に関する内容は様々に異なるが、文庫について書かれた最も詳細なものは、財団法人伊藤忠記念財団が文庫に関してまとめた報告書（2006）であろう。

報告書を記した専任担当の高橋（2006）は、文庫を開設しようという動きは1960年代半ばから盛んに見られるようになると述べている。1970年代から1980年代にかけてその数は3,000から5,000にもなったとも言われているようだ。

ところが、1980年代に入ると、家庭用ゲーム機が普及し、また塾通いをする子どもが増えたことから、文庫を訪れる子ども達の数が減っていった。これにより文庫を閉める人が増えたが、一方で1990年の生涯学習振興法[1]の制定により、学校で本の読み聞かせ活動を行う文庫関係者も増えた。現在は2001年に公布された読書環境推進法[2]の影響もあり、幼い子どもに初めての絵本を渡すという「ブックスタート事業」を始めている文庫関係者もいる。NPO法人化を選択する文庫も現れるなど、文庫の形態や活動は多様化していると言えよう。

---

[1] 生涯学習を振興するための国および都道府県の役割を決めた法律で、1990年に公布された。特徴として、生涯学習の振興に際し、社会教育団体や文化に関わる団体に加えて、教育・スポーツ・文化等の事業を行う民間事業者の能力を活用とする点が挙げられる。

[2] 子どもの読書活動を推進するための国および都道府県の役割を定めた法律で、2001年に公布された。特徴として、子どもの読書活動の推進に関する必要事項を定めることにより、その施策を総合的かつ計画的に推進し、もって子どもの健やかな成長に資することを目的としている点が挙げられる。

②仙台における文庫活動

現在、仙台では 12 の文庫が活動している。仙台で文庫活動が広まった背景には、仙台市民図書館の働きかけや民間読書運動家らの講演、児童文学者である石井桃子の『子どもの図書館』の刊行など様々な要因が存在する。

（ア）仙台市民図書館の働きかけ

仙台市民図書館は 1962 年に開館したが、当時の市民にとって図書館は受験生が勉強する場所という認識が強く、本の貸し出し冊数も少なかった。その頃東京からやってきた司書がそうした状況を憂えて、同僚と共に市民に向けて大量の本を貸し出すというサービスを実施した。文庫の会が数年おきに刊行する機関誌『手をつないで』の中の「手をつないで―五年のあゆみ」に付属した年表によると、1970 年に「図書館より月 30 冊貸出しを受け、各文庫で運搬」と書かれており、その頃からこのサービスが様々な文庫で利用されていたことがわかる（仙台手をつなぐ文庫の会 1980）。

（イ）様々な講演

1970 年前後は、仙台で母親を対象とした様々な講演が行われた。その中で、民間読書運動家が文庫活動を始めることで地域ぐるみの子育てを行っていこうと強く主張した講演があり、N 文庫の世話人 H さんはこの講演に出席したことが文庫を始めるきっかけになったという。

（ウ）石井桃子の『子どもの図書館』

1965 年に出版された『子どもの図書館』は、児童文学者の石井桃子が自らの文庫活動やその他図書館の児童向けサービスの現状と課題について綴ったものである。この本で描かれた子ども達の楽しそうな様子や、石井が詳細に記した運営の仕組みに感銘を受け、多くの人にとって文庫を開くきっかけとなったようだ。仙台の「まつお文庫」は 1977 年から現在まで活動を続ける文庫であるが、その世話人が文庫を開いたきっかけはこの本である（仙台手をつなぐ文庫の会 2010：71）。

こうした（ア）から（ウ）までのことが主な要因となって、仙台で文庫が広まっていったのである。現在仙台で活動を続ける 12 の文庫は、いずれも「仙台手をつなぐ文庫の会」（以下、文庫の会）に所属している。この団体は、それまで個々で活動していた文庫が結びつき、勉強会を開いたり、行政に対する働きかけを行ったりすることで文庫運営の向上

を目指そうと 1973 年に発足したものである。現在に至るまで、仙台市に対して図書館サービスに関する陳情書を提出し、高名な児童文学者らを招いて児童文学や読み聞かせ技術などに関する勉強会を開くなどの活動を行っている。

この文庫の会が 2010 年に刊行した文庫調査報告によると、1967 年から 1980 年まで運営されていた「もみの会地域文庫」が、仙台市で確認されている中で最も古い文庫のようである。現在は文庫の会に個人会員として籍を残している女性が、幼稚園で知り合った母親たちと共に自宅を開放して始めた文庫だったようだ。他方、最も新しい文庫は 2005 年に仙台市太白区で個人宅を開放して作られた「さんさい文庫」である。さんさい文庫は世話人が N 文庫を知ったことをきっかけに開設したそうだ。さんさい文庫の前には、1997 年に 1 つ文庫ができたのみであり、2005 年以降に新しく作られた文庫は確認されていない。

ただし、このように数は少なくなっているものの、文庫は行政から子育て支援の場としての役割を与えられている。仙台市の教育委員会や、市が設置する子育て支援施設のホームページで文庫が紹介されている他、保育士を対象とした公の講座に世話人が講師として招かれるなど、行政が文庫やそこに関わる人を積極的に用いようとする傾向が強い。仙台市における文庫は、教育の場として改めて注目され始めていると言えよう。

⑵　女縁について

高度経済成長を迎えた 1950 年代半ばから 1970 年代初頭にかけて、社会環境の変化により女性が専業主婦化したのであるが、彼女達は家の中にばかりいたわけではなかった。上野はそのことを指摘し、外に出歩くようになった専業主婦を「『外さん』化した脱専業主婦」と呼び、彼女達が作り出した「選択縁」の集団を「女縁」と定義した（上野 2008：11）。

「外さん」とは、家から出て活動するようになった女性達が、いまや 24 時間家の奥にいることがないため、「奥さん」の対義語として上野（2008）が打ち出した言葉である。続く「脱専業主婦」とは、家の中にはいないが、兼業主婦のように外で金を稼いでくるわけではない主婦のことを指している（上野 2008：5）。彼女達は PTA や公民活動、食べ歩きから市民活動に至るまで、あらゆる機会をとらえて積極的に活動を創り出し、なるべく金がかからず、かつ自分達が動きやすい「出歩く先」を創造していったという（上野 2008：

8)。

こうした「出歩く先」で彼女達が作り出すネットワークは、従来の地縁・血縁の人間関係に沿ったものというよりは、それに全く依存していないか、もしくはそれをもとに、もっと選択性の高いネットワークを独自に作り上げていた場合がほとんどであった。上野はそうしたネットワークを、「選択縁」と呼んでいる（2008：9)。そして、上野は特に女性によって創り出された選択縁を、「女縁」と定義している（上野 2008：11)。また、こうした女縁を創りだす「生き生きとエンジョイしている」女性のことを、上野は「えんじょ(縁女)いすと」と名付けている（2008：11)。家から出歩くようになった専業主婦達は、自分達に都合が良いように創り出した活動に従事することで、様々なつながり＝女縁を持つようになったのである。

上野のいう女縁は、「外さん」という表現からも明らかなように、「女は家にいるもの」という性役割を否定するニュアンスがある。この点において、女縁とは性役割から自らを解き放とうとした女性たちの創り出したつながりであるといえよう。しかし、女縁は女性を縛る性役割から完全に解放されたと言い切れることができるのだろうか。実際の文庫というフィールドからこの点について考えてみよう。

3. 文庫—N 文庫を事例に

私は仙台市内の 2 つの文庫でフィールドワークを行った。そのうちの 1 つが N 文庫である。本稿では、N 文庫に焦点を当てた記述を行う。ここでは、N 文庫の活動の概要を記し、世話人 H さんや文庫に集う母親たちがどのように文庫と関わっているのかを明らかにする。

(1) 概要

N 文庫は仙台市太白区向山にあり、世話人 H さんが 1970 年から自宅を開放して活動を行っている文庫である。H さんは民間読書運動家の講演を聞いたことをきっかけとして、文庫を開くに至ったそうだ。

N文庫の活動日は毎週金曜日で、14 時から 18 時まで開いている[3]。14 時から 16 時までは小学校に入学する前の子どもやその母親たちが訪れる。子どもたちは自らが読むためや家族のために本を借り、母親たちも自らが読むために、また子どもに読み聞かせるために本を借りていく。16 時から文庫が閉まる 18 時までは近所の小学校から子どもたちがやって来て、文庫は身動きするのも困難な程に混雑する。訪れるのは部活を始める前の小学校 3 年までの子どもたちが多く、中学生以上の子どもはほとんど来ない。

N 文庫の活動内容は、本の貸し出しと手作り遊びである。

本の貸し出し

H さんは「文庫は本を貸し出すところだからね」と本の貸し出しに積極的である。そうした H さんの考えを反映してか、N 文庫の蔵書冊数は 2007 年時点で約 7,600 冊あり、仙台市内で活動を続ける文庫の中では群を抜いて多い。本のジャンルも、幼児向けの絵本からいわゆる名作と呼ばれているものまで幅広く取り揃えている。一例として、幼児向けの絵本としてはディック・ブルーナの『うさこちゃん』シリーズや、仙台市出身の絵本作家とよたかずひこの『ワニのバルボンさん』シリーズや『ももんちゃんあそぼう』シリーズなどがある。小学生に人気があるのは、上橋菜穂子の『守り人』シリーズや『獣の奏者』シリーズである。名作としては、岩波文庫版の『三銃士』や『モンテ・クリスト伯』などがある。その他、スタジオジブリのフィルムコミックや動物図鑑や乗り物図鑑など様々な本がある。これらはほとんどが H さんがポケットマネーで購入している。

ちなみに、図書購入費は 2007 年だと 24 万から 25 万円ほどかかっている（仙台手をつなぐ文庫の会 2010 : 34)。N 文庫を訪れる子どもや母親が、そもそも「N 文庫は子どもが本と出会う場である」というイメージを持ってやって来る為か、訪問者の半数以上が毎回本を借りていくし、借りることはなくてもほぼ全員が 1 冊は本を手に取っている。

本は 1 カ月に 10 冊まで借りることができ、その為には自分の貸し出しカードを作る必要がある。本を借りる時と返却する時は、H さんにその旨を伝えなければならず、彼女が本のタイトルやそれぞれの日付をカードに記入することになっている。通常はこの手続きを厳守しなければならないが、文庫が混雑している時など H さんの手がまわらない時、通い慣れた子どもなどはカードの記入などを自分で済ましてしまう。

[3] 2011 年 1 月に、H さんの体調などを考慮して、15 時から 18 時の運営へと変更した。

手作り遊び

手作り遊びとしては、折り紙やプラ板[4]などの工作や、パンやクッキー作りといった簡単な料理などが挙げられる。新たな月が始まると、各週でどのような手作り遊びを行うかを書いた予定表が配られる。小学生は、自分の好きな手作り遊びを行う週に文庫を訪れることが多いとHさんから聞いた。

工作も料理も、いずれも H さんが材料を用意する。例えば、パン作りの時は H さんが文庫を開く前にあらかじめ材料をこねあわせておき、発酵まで終えた生地を何等分かして大きいタッパーに入れておく。タッパーは冷蔵庫に収めておき、子どもたちが来るとそこから出して作業スペースを兼ねた和室に置く。子ども達はアルミホイルを敷き、その上で生地を思い思いに成型した後、小型のオーブントースターで 5 分ほどかけてパンを焼き上げる。これは子ども達に人気が高い手作り遊びである。材料は H さんが用意する。材料費を訪問者から徴収することはなく、全て H さんのポケットマネーで賄っている。

このように主な活動は図書の貸し出しと手作り遊びの大きく 2 つに分かれるが、N 文庫では基本的に何をしても良いことになっている。但し、カードゲームや携帯ゲーム機を使って遊ぶことは禁止されている。以前これらで遊ぼうとした子どもがいたが、H さんがきつく叱りつけていた。

こうして、文庫に来た子どもたちはゲーム機から遮断される代わりに、活字と触れ合う時間を多く与えられる。貪るように本を読む子どもも少なくない。ある母親は何年も前から N 文庫に来ているが、高校受験を迎える我が子について「幼い頃文庫で沢山本を読んでいたためか、文字を読むのが苦でなく勉強が好きなようだ」と話していた。このように、文庫は明らかに教育的効果の高い場なのである。

おはなし会

N 文庫では毎月第 3 月曜日 15 時 30 分からおはなし会を催している。おはなし会とは演じ手と聞き手に分かれて、演じ手が絵本の読み聞かせや紙芝居、わらべうたなどを披露す

[4] プラスチック板に絵を描いてオーブントースターの中に入れ、熱を加えて加工・固定化する遊びのことである。

るものである。誰でも参加してよいことになっているが、子どもの参加者は多くても 2 人か 3 人であり、参加者の大半は H さんの友人である成人女性だ。

時間は約 1 時間 30 分ほどで、おはなし会が終わると参加者同士で菓子を食べながらお茶を飲む。菓子は H さんが大部分を用意するが、参加者もいくつか持ち寄って来る。18 時頃になると「そろそろ夕飯の時間だから」と誰からともなく帰り始め、会が終わる仕組みとなっている。

⑵　世話人 H さん

H さんは 1935 年生まれの女性だ。子ども 2 人は家を出て、現在は夫と 2 人暮らしをしている。毎週金曜日に N 文庫を 1 人で運営し、他の活動にも精力的に参加している。

①生まれと育ち

H さんは、祖父母が営む旅館の経営を手伝う両親のもと、3 人姉妹の次女として仙台に生まれ育った。第二次世界大戦のさなかの仙台空襲で旅館が焼け、終戦後は貧しい暮らしを余儀なくされたが、長女に続き H さんも東北大学に進学し西洋史を専攻した。

H さんは、教会活動を共にしていた J さんと大学在学中に結婚した。卒業後は大学院に進学した夫を支えるために、仙台市から離れた栗原市瀬峰の交通会社に就職した。当時としては珍しい男女平等賃金の会社であり、夫が東北学院大学にポストを得るまで、H さんは 6 年間会社勤めをした。会社を辞めた理由は、夫が職を得たということや H さんが妊娠したことの他に、「大学出てまでなぜバスガイドさんの原稿なんか作んなくちゃないのかと思っちゃってつまんなくなった」ということも挙げられると彼女は話していた。

②文庫活動との出会い

H さんは長男を無事出産し、一家は子育ての為に仙台市太白区向山で借家住まいを始めた。しかし、向山は親戚や友人のいない土地であり、頼るものは育児書のみという孤独な環境で彼女は初めての子育てをした。現在も H さんは当時を振り返っては、自分を「大変な親」だったと反省している。

そのように孤独な子育てに悩む中、近所の主婦友達に誘われて行った読書運動家の講演を聞き、彼女は「文庫活動を通して地域共同の子育てを行おう」という呼びかけに感銘を受ける。また、「（文庫活動を始めることで）妻でもなく、母親でもない自分になれるし。

文庫は自分の家でできることだったし、本を貸すという大義名分もあった」とも H さんは話す。H さんは育児不安を解消する為に地域の母親達と共同で何かする場が欲しいと考える一方で、家の外に出て活動することへ戸惑いがあったのだろう。その点、文庫は家の中で子育てをしつつ、家の中に人を入れることで外の世界と関係を持つことができ、H さんにとって都合が良かったのだと考えられる。

そうして、1970 年に自宅を開放して N 文庫を開くこととなった。さらに、仙台手をつなぐ文庫の会ではその代表となったり、行政に対して陳情書を提出する係になったりと重い役割を担ってきた。現在は、他の活動が忙しくなったことなどもあり、そうした係を引き受けることはあまりないという。こうした文庫の会での活動は、地縁や血縁の代わりに H さんを支えるつながりとなったのである。

③文庫以外での活動と現在

文庫活動を通して、Hさんは図書館づくり住民運動や紙芝居普及活動と関わるようになり、それらの活動は現在も続けている。また、Hさんのこうした活動が長きに及ぶにつれて、宮城県内外からの講演依頼が増え、現在は保育士などを対象とした講演活動も行っている。謝礼金をもらうこともあるが、それはN文庫の運営費に当てられているようだ。現在は文庫活動や図書館づくり住民運動[5]に紙芝居普及活動を定期的に行いながら、講演の為に県内外を飛び回っており、Hさんは忙しい毎日を過ごしている。

(3) N 文庫に集う母親たち

N 文庫には子どもと共に多くの母親がやって来る。訪れる母親のほとんどは専業主婦であり、N 文庫の近くに住んでいる。以下、彼女たちの中から 2 人を取り上げて文庫との関わり方を示す。

①A さん

A さんは小学校 1 年の娘を持つ母親である。夫と娘との 3 人家族で、向山地区にある社

[5] 図書館づくり住民運動とは、「住民が公共図書館についての要求を共有し、その実現のために組織をもち、地方議会や自治体の首長等に請願・陳情その他の方法ではたらきかける運動」(塩見 1976：205)のことを指す。

宅に住んでいる。A さんは仕事をしておらず、家事育児に専念している、いわゆる専業主婦である。文庫以外では余暇を利用してわらべうたなどで遊ぶサークルに所属しているそうだ。A さんは、一家が住む社宅の友人に誘われて 2008 年頃から文庫に来るようになった。A さんの夫は、数年置きに転勤を命じられる仕事をしており、一家で宮城県各地を転々としているとのことだった。

A さんの文庫での様子

A さんは娘と共に徒歩で文庫へやって来る。娘の下校時間に合わせて 16 時から 17 時の間に来ている。17 時には家に帰るという約束を夫としているようで、2009 年の 12 月 18 日に行われた N 文庫のクリスマス会でも、A さんは夕食の支度のため夕方に文庫を一時抜けていた。夫は妻子が文庫を訪れていることを認識しており、「良いところが近くにあって良かった」と発言しているそうだ。

A さんは、文庫では主に娘が読む本を借りる為の本選びを行っている。借りた本は娘が寝る前に読み聞かせているという。その為か、彼女は本について話すことが多い。絵本を選んでいる時に他の母親に向かって「私が子どもの頃はこういう絵本はなかったですからね」と話したり、「もう娘に読ませるとかじゃなくて、私が借りたいから借りてる本もあるのよ」と言ったりしていたのを聞いた。

A さんは本を読んだり選んだりする他に、世話人の H さんや文庫に来ている他の母親達と雑談することも楽しみにしているようだ。N 文庫には A さんが住んでいる社宅の人や小学校で知り合った母親たちも多く訪れる為、以前からの知り合い同士で話しこんでいる様子も N 文庫ではよくある光景だ。また、A さんは子どものいる友人を連れてきて文庫を紹介することもある。一方、文庫で知り合った母親とは多少親しくなっているようだが、文庫以外の場所で会うことはないとのことだった。

A さんが文庫に来る理由

A さんになぜ文庫に来るのかとたずねると、彼女は「H さんと会うのが楽しいから」と答えた。確かに、文庫に来ると A さんは必ず H さんと話をし、2 人で話しこんでいる姿もよく見る。しかし、だからといって A さんが 1 人で文庫に来ることはなく、必ず娘を伴って来る。彼女は H さんと話をするために来ると話すが、あくまでも主目的は娘の本を借りることなのである。

②B さん

B さんは 10 歳と 6 歳の娘を持つ母親である。A さんとは同じ社宅に住んでいるため、娘同士は文庫以外の場でも親しくしているようである。文庫には近所の人から教えてもらったのがきっかけで 2004 年から来るようになったという。「近所の人」と B さんは言っていたが、これもおそらく同じ社宅に住んでいる人のことであろう。B さんは仕事をしておらず、家での家事育児のかたわら文庫を訪れ、あるいはそれ以外に友人と手芸をしたり、茶道サークルに入ったりしている。

B さんの文庫での様子

B さんは娘が幼稚園と小学校から戻ってくる時間に合わせて 15 時から 16 時の間に文庫を訪れ、その後は 17 時か 18 時までいる。娘と共に徒歩か車で文庫にやって来る。ただし長女は小学校のバドミントンクラブに入ったため、ほとんど文庫に顔を見せなくなっている。

B さん親子はほぼ毎回文庫を訪れる。文庫にやってくると、まず B さんが H さんに本を返却し、娘は H さんに挨拶をした後に手作り遊びを行う。B さんは、本を返し終わると H さんと話をしたり、自分も娘と共に手作り遊びに加わったりする。A さんなど文庫以外でも顔を合わせるような人がいると、母親同士で雑談をしていることもある。B さんのこうした文庫での振る舞いは、A さんとほぼ同様である。B さん親子が文庫に来ていることを夫は知っており、「近くに本を借りることができ、手作りなどで楽しく過ごせる場所があって、ありがたい」と言っているそうだ。このように、文庫に通うことを家族が快く認めているということも、A さんと同様だ。

A さんと異なる点として、B さんは娘と共におはなし会にもやって来るということが挙げられる。私が 3 回おはなし会に行ったうち、2 回は B さんと娘が来ていた。B さんと次女は聞き手としてのみおはなし会に参加しているが、長女は友達を連れてきて一緒に紙芝居をやるなど演じ手として参加している。B さんは長女が演じている姿をほほ笑みながら見つめていた。娘の成長ぶりを見るのが嬉しいという様子がうかがわれた。

B さんが文庫に来る理由

私が彼女になぜ文庫を訪れるのかたずねたところ、B さんは「子どもに本好きになってほしいし、自分も本の選び方を H さんから教えてもらうことができる」、「H さんの子ども

達に対する優しい接し方が参考になり、自分もそれを見て安らぐことができる」からだと答えた。ただし、どちらかというとBさんは自分が文庫で何かをするというよりも、文庫で遊んでいる我が子を見て嬉しそうにしていることが多いように感じる。その点では、自分の為というよりは子どもの為に文庫に来ているという印象を受ける。

4．おわりに—女縁からみる文庫

ここでは、N文庫の事例をもとに女縁を再考察する。

文庫での人々のつながりは、一見すると上野(2008)の指摘する女縁であるかのようだ。例えば、世話人のHさんについて、彼女は血縁や地縁のないところに文庫を創ることで、新たなつながりを創りだした。文庫では「〇〇君のお母さん」「〇〇さんの奥さん」といった呼び名ではなく、「H さん」と個人の名前で関わっている。また、文庫を拠点として、図書館作り住民運動や紙芝居普及活動、更に宮城県内外の講演など幅広く外に出歩いている。Hさんはまさに、上野 (2008) がいうところの「えんじょいすと」であるといえよう。

文庫に集う母親として取り上げたAさんやBさんについては、いずれも同じ社宅に住む友人にN文庫の存在を教えてもらったことがきっかけで文庫に通うようになった。その社宅に住んでいるという母親は、2人の他にも何人か見たことがある。おそらく、N文庫に通うということがこの社宅に住む女性たちの一種の通過儀礼であり、その存在を教えてもらうことは社宅における人間関係の親密さの度合いを示しているのかもしれない。この点からすると、文庫に通い始めたきっかけは地縁や血縁のように、固定されたつながりによるものだといえる。

だが、文庫に通い続けるかどうかは個人の判断に任されているようだ。AさんとBさんは毎回文庫に通う熱心な母親であるが、他に社宅から来ている人の中には、筆者のフィールドワーク中に1度しか見たことがない人もいる。このように、文庫に通い続けるということは選択性を帯びたものである。また、通い続けるうちに、両者ともHさんとのつながりができている。この点において、文庫に集う母親たちも女縁を創りだしているということができる。

以上の点に注目すると、文庫での活動を通して世話人とそこに集う母親たちが女縁を創

りだしているということができ、文庫活動は女縁活動であるかのように思える。

しかし、文庫活動が上野（2008）のいう女縁活動とは必ずしも一致しない点も指摘することができる。例えば、N 文庫の世話人である H さんは文庫を開くことを決意した一因として「文庫は自分の家でできることだったし、本を貸すという大義名分もあった」ことを挙げている。これは、H さんが「女は家にいるものである」という女性の性役割から逸脱しない範囲でできる活動として文庫活動に注目したことを表している。また、「本を貸すという大義名分もあった」という言葉からは、H さんのうちに、本を貸すという教育的内容ならば母親が行う活動内容としても妥当だろうという考えがあったことが分かる。

文庫に集う母親たちについても、A さんと B さんは口に出しては言わなかったが、自宅と文庫との距離の近さが重要だといえる。彼女たちの住む社宅は文庫の近くにあり、徒歩で通うことができる。こうした利点を利用して、A さんはクリスマスパーティーの際に一度文庫を抜けて夫の食事を用意し、また文庫に戻って来るといったことを行っている。つまり、文庫と自宅が近いことで彼女たちは家事に支障をきたすことなく活動に関わることができるのである。

文庫の主な活動が本の貸し出しであるという教育的内容も、夫からの理解を得ることを助け、彼女たちが安心して活動に関わることを可能にしている。また、A さんや B さんは文庫に来る度に H さんから助言を得ながら何冊も本を借りていく。そうして沢山読ませていった為か、B さんの長女は文庫にあるほとんどの本を読みつくし、本を読むことを好きになったようだ。このように、文庫活動は実際に子どもの教育に良い影響を与えていることがわかる。

以上を整理すると、世話人にとっては「女は家にいるものだ」という性役割に逸脱しない活動として文庫を選択したことがわかる。母親たちについても、文庫が自宅から近いという物理的な面や、文庫の活動が教育的であるという点が、家事育児を担う主婦である彼女たちにとって、自らの役割を損なうことなく関わることのできる活動として受け入れられたといえよう。

こうした点から、文庫活動は女性達が自らの性役割に縛られた中で、それに沿うものとして創りだした女縁活動であるといえる。女縁を示した上野（2008）自身も、えんじょいすとが夫の安定した収入なしには活動できないことや、彼女たちが女縁活動をする際に「子

どものため」という言葉を使って夫の理解を得ている点などを著作で示している。しかし、それ以外では、上野は女縁活動について、おおむね性役割からの解放というポジティブな面を強調する。しかし、本稿で見たとおり、この点については再考を迫られよう。女縁とは、女性たちが性役割に縛られた中で、それに支障をきたさない範囲で創り上げてきたものであり、そしてまさにその点こそが、女縁活動を可能にした最大の要因だということができるだろう。

引用文献

仙台手をつなぐ文庫の会

1980　『手をつないで―5 年のあゆみ』仙台：仙台手をつなぐ文庫の会。

2010　『文庫　ぶんこ　BUNKO　文庫調査報告』仙台：仙台手をつなぐ文庫の会。

塩見昇

1976　「図書館づくり住民運動と地方自治」図書館問題研究会編『図書館づくり運動入門』pp.199-240、東京：草土文化。

上野千鶴子

2008　『「女縁」を生きた女たち』東京：岩波書店。

東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange10:56-77(2011)

資料と通信

じんるいがくフェスティバル報告

高倉浩樹・川口幸大・曽我亨・坂井正人

2010 年度第二回東北地区研究懇談会として、「じんるいがくフェスティバル」を開催した。この企画は、互いに離れているために疎遠になりがちな東北地方の各大学で人類学を学ぶ学生の交流そして人類学を教育する教員同士の交流を促進するために企画されたものである。

本小論では、この企画がどのような目的をもって行われ、どのように準備されたのか、参加した学生はなにを得たのか、そして最終的にはなにを達成したのかについて報告したい。

1. 目的と概要

2010 年 10 月 16 日（土）に東北大学川内キャンパスで「じんるいがくフェスティバル―人類学および隣接分野をまなぶ学生と教員の大学間交流」を開催した。この企画は文化人類学会学会員と東北地区の大学で人類学を学ぶ学生の交流を目的としたものである。

東北地区といっても、例えば青森県と福島県を結べば、東京-大阪間に匹敵するほど距離があり、交通の便からすると地区内のどこかに集まるより、東京の方が楽という事情がある。そのため地区全体で懇談する機会を設けることは難しかった。こうした事情は東北地区に限ったことではないことかもしれない。今期の東北地区では理事の高倉に加えて、弘前大学の曽我亨氏、山形大学の坂井正人氏、東北大の川口幸大氏に幹事を引き受けていただき 4 人で企画を検討する体制を整えた。立教大学で開催された 2010 年度の研究大会で会合をもったが、そこで各大学の学部生に対して人類学のおもしろさを伝えるような企画を通して交流するという提案が出されたのである。フィールドワーク実習などで学ぶ学生から報告等をしてもらい、各大学の学生がどのように人類学を学んでいるかを、相互に知る機会を設けようとなった。

その後、関係者の間でメール会議を続けながら、最終的に決まったのが、「じんるいがくフェスティバル」という名称であり、学生の発表・教員と学生のグループによるセッション・懇談会という三部構成の番組だった。東北地区研究懇談会の企画としては、教員やポスドク、大学院生などからなる学会員に対して、学部で人類学を学ぶ学生との交流の機会を提供するものとして位置づけた。また学生に対しては、文化人類学のオープンキャンパスとして参加を呼びかけた。

当日は午後１時、第一部「フィールドワーク実習はたのしい―学生研究発表会」で幕が開けた。これは各大学から数名ずつ発表者を募り、最初に口頭で発表者の自己紹介とセールスポイントを発表してもらい、その後ポスターセッションを実施した。各大学の発表は以下の通りである。（1）「ムカサリ絵馬と結婚観」伊藤瑛・山形大４年、（2）「内モンゴル自治区のモンゴル人アイデンティティ」成田慧 ・山形大 4 年、（3）「大間生活史調査―なぜ人は出稼ぎをするのか」弘前大人生班・2/3 年（芦澤佳奈、瓜田史花、小野寺薫、佐々木湖乃美、佐藤巧弥、佐藤百恵、陳欣、船橋千尋、星川渓、村山彩香、四橋歩実、浅野香織、三上史矩）、（4）「みちのく、春のウグイ漁―川漁師の役割分担」弘前大岩木川班・2/3 年（小笠原絵理、寺島圭、村上大樹、稲井美理亜、大川麻里菜、柏谷諒、鈴木拓斗、種市潤、山本美希）、（5）「現代を生き抜く職人の世界」弘前大仕事班・3 年（櫛引咲子、庄山早希）、（6）「＜生きがい＞をつくるシニアたち―仙台 NPO 法人を事例に」金川昌太郎・東北大４年、（7）「＜石巻茶色い焼きそば＞をつくりだす―地域グルメの対象化についての一考察」佐藤幸亮･東北大 4 年、（8）「＜文庫＞の人類学的研究―母親が集う場の一考察」成田梨加・東北大４年、（9）「仙台パフォーミングアートのフィールドワーク―アートにかかわる人々のライフスタイル」山際一輝・東北大 4 年、(10)「外国人花嫁のライフヒストリー」移川美由紀・東北学院大４年、(11)「アメリカの大学社会における LGBT」佐藤佐喜子・東北学院大４年。個人発表・グループ発表双方があったが、文化人類学を学んだ学部生が自分自身でどのような課題を見つけ出し取り組んでいるのかがわかり大変興味深いものだった。

第二部は「じんるいがくの魅力をめぐる本音トーク―学生と教員によるグループ・セッション」を行った。これは事前に提出された学生参加者名簿を元に、6 組にクラス編成を行い、そこに所属や調査地域の異なる二人の教員＝学会員をいわば担任のように配置して

行われた。教員はいわば対談する形式で、互いの自己紹介をおこない、なぜ人類学者になったのか、調査地でどのような暮らしをしているのか、調査地で楽しいこと、つらいことなどを話しながら、学生にも加わってもらうフリートークが行われた。アドリブで行われるので多少難しい面もあったが、同僚との会話を学生にみせると同時にそこに巻き込むという経験はなかなか刺激的であった。

第三部は生協での懇親会である。会場内では、飲み物や食べ物を持ちながら小さなグループがいくつもでき大いに盛り上がった。弘前大グループはバスで戻ることもあり、5 時半にはフェスティバルを終了し、解散となった。

秋晴れの好日のなか、弘前大学から 29 人、山形大学から 22 人、東北学院大学から 6 人、東北大学から 34 人と合計 91 人の学生が参加し、これにくわえて学会員（教員等）は 11 人が加わり大変な盛会であった。

（以上、『文化人類学』75-3 号(2010)より再録）

2. 準備の過程

(1) 東北大学の場合

川口幸大

文化人類学フェスティバルでは、東北大からは 4 人の学生がポスター発表を行った。全員が文学部の文化人類学専修に在籍する 4 年生の学生である。

東北大文学部の学生たちは、2 年生より各専修に分かれ、専門分野について本格的に勉強を始める。文化人類学専修では、特に 3 年時に取り組む「文化人類学実習」が最も重要な科目となっている。各々の学生が、独力で調査対象を探し、コンタクトを取り、約半年かけてフィールドワークを行い、その結果を『実習報告書』としてまとめるのである。まさに人類学の醍醐味を実感できる授業だが、時間と労力と行動力を要し、それゆえに苦労する学生も多い。それでも大半の学生はどうにか報告書の執筆にこぎ着け、例年おおよそ 8 割の学生が実習のテーマを発展させて卒業論文を執筆する。今回発表を行った学生たちも、みな目下卒業論文を作成中であり、そのテーマも、一人を除いて、3 年次の実習から継続的に取り組んでいるものである。

文化人類学フェスティバルの企画が固まった7月中旬、発表者を募るメールを学生に出した。こちらとしてはみなに発表してほしかったが、時間の都合上それは難しいので、自ら手を挙げてきた学生を優先させることにした。結果として4人が発表することになったが、みなもちろんポスター発表は未経験である。そこでまずは7月末に発表者たちと会合を持ち、とにかくフィールドワークの状況を分かりやすく伝えること、そこから何を言いたいのかをはっきりとさせることをアドバイスした。夏休みの間、各自で準備を進めておくこととし、9月中旬にあらためて集まることにした。

夏休みが終わって9月に集まったときには、みなフィールドワークは進んでいるが、ポスターの制作も含めて、「どう伝えるのか」について悩んでいるようだった。ちょうど9月28日には研究室全体での卒業論文の中間報告会があるので、とりあえずはそれに向けて準備をし、そこでの反応を参考にしてポスターを作ってみようということにした。

卒論中間報告会から約10日後10月8日、草案段階のポスターを前にしたリハーサルを行った。言っていることとポスターの内容がかみ合っていなかったり、ポスターに情報を詰め込みすぎていたり、話のポイントがいまひとつはっきりしなかったりと、さまざまな課題が出た。本番の3日前には業者に原稿を出さなければならない。話すことは本番までに調整できるが、ポスターは印刷してしまうと変更がきかない。少しでもよいポスターになるようにと、締め切りまでにさらに2回のリハーサルを行った。

どうにか業者に印刷を発注し、本番2日前にポスターが仕上がってきた。それを前にして、合計3回のリハーサルを行った。とにかく簡潔で分かりやすい話し方ができるようになることと、質問に対して過不足なく答えられるよう準備すること、の2点を心がけた。本番に向けてみな緊張が高まり、気分が高揚しているのが分かった。

また発表の準備だけではなく、当日の一週間前からは、他の参加者たちと当日の役割分担も行った。バス誘導、受付、会計、カメラ、タイムキーパー、会場案内、懇親会会場の準備といった係を決めた。当日は開始の3時間前に集合し、直前の準備はみなで行うことにした。

本番は、ポスターのパネルが風で倒れたり、懇親会会場が人数に対して狭くて移動が難しかったり、あるいは料理があっという間になくなったりといった問題点もあったが、全体としては大過なく、いや大きな成功のうちに、エンディングを迎えたと言えよう。

発表者たちも、何よりも活き活きとポスターの前に立ち、質問に答えていた。終了後の疲労感と充実感でいっぱいのその姿こそ、文人フェスの成功を何より物語っていたように思う。

3. 学生たちの声

参加した学生から得られた感想は以下の通りである。各大学それぞれ自由な形で感想を集めたので、体裁が大学毎に異なっているが、生の学生の声を伝えるということでそのまま掲載する。

(1) 山形大学

山形大学からは3人の学生がレポートのような形式で参加感想記を送ってくれた。

成田慧（4年生）

a. 複数の学校が参加する事

普段人類学をやっている学生と接する機会はほとんど無いので、今回良い刺激になりました。卒論の進め方や色んなテーマに触れることが出来たので良かったです。 自分の学校では見られない地域色の強いテーマなど、大変興味深いものがたくさんありました。

b. 文化人類学の先生との座談会

自分の大学の先生以外とはほとんど接する機会がないので、これも良い刺激になりました。全員が対象とする地域が異なるため、お話を聞くだけでも世界の文化に触れられたような感じがしました。また、フィールドの具体的な方法や、個人的な質問にも答えて頂いたので、勉強になりました。個人的な感想になりますが、以前から本で名前を拝見しただけの瀬川先生とお話できたのは感激でした。

c. 交流会

お酒まで出るとは思っていなかったので、正直びっくりしましたが、そのおかげで初対面の学生とも打ち解ける事が出来ました。ちょうど小腹が空く時間帯だったこともあってよかったと思います。用事があったため、散会後にすぐ帰宅したのですが、後片付けを東北大の人だけにお任せしてしまったのはちょっとご迷惑だったかな、と思いました。申し訳ありません…。次回は全員で片づけられる様な決まりにしてしまうと良いのかも知れま

せんね。

d. 次回以降改善して頂きたいと感じたこと

・発表場所の変更

風が強く、ポスターがはがれていまい、見学者の方にご迷惑をかけてしまいました。壁のある所をお願いしたいです…。

・発表スケジュールの決定

実は自分のポスターに人が集まって来たのを見て、他の方の発表を満足に見る事が出来ませんでした。「席をはずします」という旨を書いてはいたのですが、やはり気になってしまいました。大学ごとに時間を設けてローテーションで回す方法など、何かしらの対応をお願いしたいです。（A 大学の発表中、B、C 大学の発表 者は見学に徹する、など。）

もう少し質問したかったこともあったので、ちょっと残念でした。

・座談会の時間をもう少し長くすることと、場所の確保

時間が短く、全員が質問する事が出来なかったため、もう少し時間を取って欲しいと思いました。折角の機会なので、たくさん質問したかったです。あと、外でやったグループが寒かった、と言っていたのを聞いたので、次回はどの季節に開催されるかわかりませんが、雨天時のことも考えて全グループが屋内に入れるよう にして頂きたいと思いました。私達のグループとかち合って外に出られたグループがあったので、ちょっと申し訳なかったです。

・各大学への早期連絡

実はあの発表ポスターは 2 日前に徹夜で作成したものでした。私達の大学は 10 月 10 日の中間発表が終わった後に発表者が決定したため、準備期間が短く、正直大変でした。坂井先生のお考えもあったのかも知れませんが、どの様な内容のポスターを作れば良いのかも私達には良く伝わっていなかったため、急いで仕上げ ましたが、正直あの内容には満足していません。もう少し早く連絡を頂けたら準備にも時間をかけられたのではないかと考えています。各大学の卒論の進め方に差異があるとは思いますが、もう少し早めの連絡をお願いしたいと思いました。

加藤亜梨沙（3 年）

a. 参加してよかったこと

この企画に参加してよかったと思う点は 3 つある。1 つめは、他の大学では文化人類学の研究対象をどんなものにしているのかを知ることができたことである。

今まで、山形大学の先輩の卒業論文は何回か聞く機会があった。先輩方の卒業論文を聞くだけでもどんなものを（文化人類学・宗教史の）卒業論文の題材にすればよいのか、どんな点に着目すべきなのかがなんとなくわかった。しかし、今回、他の大学の方々のパネルでの発表をきき、また質問する機会をもてたおかげで、研究の題材として考えられるものの幅を広げることができたと思う。

個人的には、宮城県の「個人宅を地域の図書館の代わりにする」という仕組みについての発表が面白かった。山形にもそういった仕組みが存在する地域があるのか気になった。

2 つめは、実際に海外へフィールドワークに行っている方々（自分の大学以外の先生）の話を聞くことができた点である。現地で苦労した話などを聞くのも楽しかったが、卒論のテーマについてのアドバイスをもらうことができ、とてもためになった。

3 つめは、他の大学の学生と話をする機会を持てたことである。参加する前は、本当は第三部にあまり出席したくなかった。しかし、実際に行ってみると、第 2 部で自分がした質問に興味を持って話しかけてくれる（意見をくれる）人がいたり、お互いの大学の授業内容の違いについて話すことができたりと、想像以上に楽しい時間を過ごすことができた。また、第 2 部で質問したりなかったことを先生方に質問することもできた。

b. 改善したらよいこと

改善した方が良いと感じた点は 2 つある。1 つは現地への移動の仕方である。今回、山形大学の学生は現地集合であったが、それだと受付がスムーズにできないようであったので、他の大学のように、学生同士まとまって行動した方がよかったのではないかと感じた。それにより、遅れてくる学生の把握などもしやすくなると思う。

2 つめは第 2 部に使われる時間である。1 で書いたように、第 2 部は他の大学の先生方に質問することができ、たいへんためになった。しかし、3、4 人が質問するとすぐに時間が過ぎてしまった。他のグループの中には、全員の自己紹介をしただけで時間になってしまったところもあったという。せっかくの機会なので、できることならもう少し長く質問

し、話を聞くことのできる時間が欲しかった。

本間海

a. 参加して良かったこと

ポスターセッションは、他大学の人類学や社会学を専攻している学生が、どのようなことに興味を持って学んでいるかを知れて良かったです。こんなことも人類学に当てはまるのか、という驚きが多々ありました。また、弘前大学のグループ研究がおもしろく、機会があれば自分達もやってみたいと感じました。

グループセッションは、それぞれの先生の人類学を始めるきっかけや、フィールドへの入り方、フィールドに入っている時の意識など、普段なかなか聞けない実践の話を聞くことができ、貴重な経験ができたと思います。個人的には、フィールドワークに行った時に現地の皆さんに「何を調べているのか？」と聞かれた際の答え方を聞けたので、参考にしたいと思いました。

懇親会は、他大学の方とお話する機会がめったにないので、普段の学生生活のことなども含めて聞けてよかったです。予想外にお酒や食べ物がたくさん出されたので、おいしくいただきました。

b. 改善したらよいこと

ポスターセッションについて、大学によってポスターの形式が異なっていたため、最初の 5 分足らずの説明と一見しただけでは全体像がつかみにくく、質問もしにくい場合がありました。形式をある程度統一したら良いのではないかと感じました。

グループセッションでは、私たちのグループは普通の教室で行ったので、先生方との距離があり、最初は質問をしにくく感じました。できれば、互いに学生や先生の顔が見える並び方だと良いと思いました。意外と時間が早く過ぎたので、もっと時間を長くしてもいいのではと思います。

懇親会は、席も決まってなく自由でしたので、自分の反省点でもありますが、同じ大学同士で固まっていることが多かったです。もし可能ならば、最初だけ適当に学校がばらけるように、席を割り振っても良かったかもしれません。グループセッションのグループ分けのまま懇親会に移ってもいいかなと思いました。30 分後ぐらいから自由行動にするなど、

段階があったらいいと感じました。

c. その他気付いたこと

ポスターセッションは、発表者がほとんど自分の解説で時間がとられて、他の発表を見れなかったそうなので、ある程度タイムスケジュールを定めたらいいと思います。全体の進行を担当していた高倉先生が、声を張り上げて次の動きを説明をなさっていたので、司会者の負担軽減にもつながると思います。

今回のフェスティバルを通して、フィールドワークに対する興味が大きくなりました。今後もこのような機会があるとうれしいです。

⑵ 弘前大学

弘前大学の場合、参加者全員が、それぞれのセッション毎に感想を書いてくれたので、それを以下のように整理した。

a. 第一部ポスター発表：どの発表のどの点が面白かったか

・町づくりに興味があるので、「文庫」の人類学的研究、「茶色い焼きそばを作り出す」の話がきけてよかった。

・「ムサカリ絵馬」の発表がおもしろかった。死者と結婚させるという考え方が新しい考え方でとても新鮮だった。

・仙台の NPO 法人についての研究がおもしろかった。「生き甲斐」の指標や話がやや不透明だったが、NPO が新たに NPO を生み出す可能性は興味深かった。

・「ムサカリ絵馬と結婚観」の発表がおもしろかった。死者を絵馬のなかに描くことで結婚させるという行事が現代にも存在しているという点が興味深かった。

・「ムサカリ絵馬と結婚観」の発表で、この儀式が今でも続いている点や、ムサカリ絵馬専門の絵師が以前いたという点がおもしろかった。

・「文庫」の発表がおもしろかった。弘前でそういう活動をしているのをみたことがないし、図書館でも保育館でもないそんな空間に興味をもった。あと「ムサカリ絵馬」の発表もとてもおもしろくて、弘前の人形でもそういうものがあるらしいという話も聞いたので、個人的に調べてみたいと思いました。両方とも積極的に質問できました。

・「アメリカの大学社会における LGBT」がおもしろかった。LGBT は以前から興味があ

る分野だったので、イントロの時から気になっていた。調査者独自の男女の特徴のふりわけなど調査では観察を何よりも重要にしてるところがよかった。交流はとくにしなかった。

・自分の班の発表であまり積極的に発表できなかったことが残念だった。発表者の人たちがそれぞれ興味関心にしたがって調査をしていることはわかったが、自分は正直にいうとあまりどの発表にも興味をもてなかった。

・「外国人花嫁のライフヒストリー」がおもしろかった。韓国人の花嫁同士でも仲はあまりよくないみたいな話をしていて、その点が意外でおもしろかった。質問をして交流した。

・「ムサカリ絵馬と結婚観」が興味深くて、民俗学的にもおもしろいと思った。初めて聞く風習で興味がわいた。

・「文庫」についての研究がおもしろかった。私にとって文庫というものはあまり身近ではなかったのですが、仙台市内のある地域では非常に地域に根付いたものであるということがわかり、本を読む場としてだけでなく、他の機能もあるところがおもしろかったです。発表者と直接会話しました。

・「ムサカリ絵馬と結婚観」がおもしろかった。死者の結婚という普段では絶対にあり得ないことを研究対象としていて、でもこれは今現在もおこなわれているというのはおもしろい。

・どの発表も着眼点がとてもおもしろかった。とくにムサカリ絵馬は写真があり見ていて分かりやすかったし楽しかった。

・自分が一番興味をそそられたのは、東北大の佐藤さんの発表だった。今話題のＢ級グルメを題材に地域の活性化などの話につなげていくのがおもしろかった。

・自分たちのポスター発表を説明するのがおもしろかった。みんな興味津々にうんうんとうなづいて聞いてくれるので、説明しがいがあった。自分たちの研究に誇りがもてた。他の発表はあまり聞かなかったです。

・「文庫」の発表がおもしろかったです。「文庫」ということを知らなかったので、このような場もあるということに興味をもちました。

・「茶色い焼きそばを作り出す」がおもしろかった。調査の結果、日本がどう変わったかという結論がおもしろかった。自分が発表した際には、東京大の菅さんの川の漁についての論文が参考になるとアドバイスしていただき為になった。

・「ムサカリ絵馬と結婚観」の発表が興味深かった。個人情報に関連して社会問題化したという話があり、それにも関わらずまだ続いているという点がおもしろかった。
・「文庫」の人類学研究がおもしろかった。母親が給与なしでボランティアとしての文庫の貸し出しを行っている点などがおもしろかった。疑問に思ったことを質問した。
・「外国人花嫁のライフヒストリー」がおもしろかった。わからないところを質問したりして交流した。
・人が混みあっていて東北学院大の学生 2 人の発表しかじっくりみれなかった。LGBT の研究をしている人の発表がおもしろかった。アメリカでの当事者の考え方、自覚の仕方が聞けた。
・発表していてほとんど他の発表がみれなかった。途中から話しかけるのにも戸惑った。かってに見て回って、興味があるのがふらっとみれてよかった。
・「内モンゴル自治区のモンゴル人アイデンティティ」と「外国人花嫁のライフヒストリー」の発表に興味をもった。私は卒業論文で留学生のアイデンティティについて書く予定なので、興味深かった。

b. 第二部グループセッション：どんな話が面白かったか

・社会調査についての不安・おもしろいところ・大変なところについて話し合いました。4 年生や教授の方々も、自分たちと同じような不安をもっていて参考になった。
・他の学校が 2 年生でフィールドワークをしていないと知って、うちの大学は早くにやっていて大変だとおもったが、反面とてもすばらしいと思った。
・2 人の教授の話に差があったりして、場所によって方法ややり方など千差万別なのだとわかりました。
・主に自己紹介で時間をつかってしまったので、あまり人類学的なくわしい話はきけなかった。しかし院生の方や卒論のテーマに関する内容のお話がたくさんでてきて参考になりました。
・同じ題材で中国とアフリカでの違いについての話がおもしろかった。食事の話やトイレの話が印象的だった。
・外国で研究を進めるとき、そこの文化に慣れず、また日本に帰ってきたら今度は日本の

食べ物が口に合わなかったなどの苦労話がおもしろかったです。

・人類学者も調査では苦労をし、調査前は調査にいきたくないと思うことがある。そのような本音を聞けてよかったと思います。

・タイのプーケットでダイビングショップで働きながら調査しているという話が興味深かった。

・先生たちが調査にもっていくものを「格好つければフィールドノート」と言っていた話がおもしろかった。

・人類学的な枠組みではなされていたのですが、質と量を組み合わせた調査をしてみたいと思いました。スキューバダイビングの話がおもしろかったです。

・いろいろなことが聞けておもしろかったが、「一つだけ現地に持っていくとしたら？」や「人類学とは何か」などが特におもしろかったです。

・トゥルカナでの調査中の生活についてのお話がおもしろかった。

・沼崎先生の台湾での餃子の話やカメラの話がおもしろかった。

・人類学とは何か。先生方の経験を例にいろいろ話が聞けておもしろかった。

・中国の現在の経済状況やフィールドワークで苦労したことが聞けておもしろかった。

・普段は聞けないようなフィールドワークのつらさ、おもしろさの話を聞けておもしろかったです。

・フィールドワークをやめたくなったときの話などおもしろかった。調査・研究についての考えが聞けて楽しかった。

・中国の人がケニアに多く、逆にケニアの人も中国で増えている、という話がおもしろかった。

・各班員の研究分野や興味のあることを発表しあって楽しかった。

・先生方にいろいろ質問して、たくさんいろいろな話を聞けた。

・市野澤先生の観察の方法、人類学の特徴の話がおもしろかった。一年以上、東南アジアのお店で従業員として働きながら、調査したというのにおどろいた。

・誰の話というよりも、どんな人がどのようなことに関心を持っているのかが聞けてよかった。先生の話ではなく自己紹介がメインで、次の懇親会ではなしたい相手を見つけるのに役だった。

・人類学とはどのような学問なのか、フィールドにでるときにはどのようなことに気をつけているのか、などの話を聞いて、社会学と異なる点にあらためて気づくことができた。

c. 第三部懇親会：どのように交流したか

・他大学の 4 年生の方に、卒論について不安なことを相談にのってもらいました。
・他の大学と交流することはまずないことなので、学術的な話から大学生活のことまで幅広く話すことができ、とてもおもしろかった。
・各大学の方々と話ができ、カリキュラムや特色、研究内容について話を聞くことができた。
・山形大の 4 年生の方たちとお話しました。
・4 年生の方に卒論のテーマや進め方などを聞きました。あと就活についての話もしてもらいました。
・盃を交わしました。
・あまり交流できなかった。
・他の大学の人たちと卒論のことなどを話した。
・お酒を飲みながら楽しく話しました。
・山形大の 4 年生とお話できました。弘前大の岩木川班の人とも交流しました。
・とにかく楽しくはなせた。弘前出身の他大学の方と話した。
・山形大の人と少し話した。他には弘前大の人生班の人たちといろいろはなせて楽しかった。
・疲れて黄昏てしまった。飯がすくなかった。
・他大学の人とそれぞれの大学について話をして交流しました。
・山形大学の学生や中国人留学生と交流した。他の大学ややっている卒論の内容など聞けてためになった。高倉先生のシベリアの話がおもしろかったです。
・東北大の学生と話し、仙台の文化の話や東北大の仕組みなどの話を聞けた。インドのある民族について卒論を書いている人の話が、その研究の出発点しか聞けなかったがためになった。
・いろいろな大学の人と話した。

・韓国からの留学生や東北大の学生と、大学の話や国の話などをして、とても楽しかった。
・東北大の中国からの留学生と、山形大の 2 人と話した。互いの大学の特徴や、今研究していること、興味があることについて盛り上がった。
・B 班のポスターの時はなせなくて、私の卒論と似た対象を研究している人がいたので話した。他大学の先生に悩みや不安を話すことができていろいろ聞けてよかった。
・ポスター発表を聞きに行った相手の学生と、どうしてそのテーマに関心を持ったのかについて話しました。他に自分たちの学校についてなど、雑談をして交流しました。

d. 全体として：参加の感想、良かったこと、改善したらよい点など

・グループセッションでもっと活発な議論・意見交換があればよかった。先生によっては何をすればよいかわかっていない人もいたので、時間も短いのにもったいないと思った。
・まだ初回ということで、どうやらグループセッションが先生方も何をしていいかわかっていなかったようなので、少し題を決めて発表させるとかして活発になればよいと思う。
・新たな知見が広がった。来年やるならまた参加したい。
・いろいろな大学の方とお話できたので、とても貴重な時間でした。
・たくさんの研究を知ることができてよかった。
・発表を全部見て回れなかったので、その時間をもっと増やして欲しいです。人類学フェスティバルに参加して、自分の思い描いている卒論を少し見直そうと思いました。他の人の研究を聞けてとても楽しかったです。ポスター発表で質問しやすい場所づくりもよかったと思います。
・質問や交流など各セクションにもっと時間がほしかったです。全体のスケジュールが厳しいと思うので、半日ではなく一日かけてやりたかったです。できるならば。
・同世代の人たちがどんなことに関心を持って調査しているのかを知ることができた。よい刺激になったと思う。
・山形大や東北大など、普段なかなか交流できない人たちとそれぞれの大学のことなどを話して楽しかった。ポスター発表の時間があまりなくて、1 つか 2 つのポスターしかみれなかったので、もっと多くのものを見たかった。
・様々な知見を得られる場であったので、また開催したら参加したいと思いました。発表

の時間がもうすこし欲しいかなと思います。

・改善点として、班によっての参加度の違いが気になりました。参加してみて普段考えたこともなかったテーマを研究している人がいて、それについて詳しく知ることができたので楽しかったです。（注：弘前からは 3 班が参加したが、そのなかで、この学生が所属する班の学生は参加者が 2 名と非常に少なかった。そのことを改善点としてあげている。）

・自分たちの社会調査しかみたことがなかったので、他大学の研究を聞くことができ、今後の卒論のための参考になった。また立食会を通じて交流できたり、グループセッションで教授の話も聞くことができた。

・他大学の発表が聞けたことがよかった。

・ポスター発表という普段はやらないことができてよかった。自分はオープンキャンパスに参加できなかった分、今回、いい経験ができたと思う。（注：弘前では、オープンキャンパスのときに、学生が実習の成果を高校生にポスター形式でプレゼンする。そのことを指している。）

・想像よりもぜんぜんおもしろかった。ただダルいだけだと思っていたが、行ってみると意外にナイス！やっぱり、とりあえず参加するという気持ちが大切なのですね。飯が少ないです。場所が狭いです。

・仙台は遠かったけど、他大学の人の研究を聞けるという貴重な体験ができてよかったです。

・参加してよかったです。

・ポスター発表、グループセッションの時間がともに短かった。あと 30 分は欲しい。

・他大学の情報をたくさん聞けてよかった。

・グループセッションとかとても為になった。

・ポスター発表が見づらかったので、もっと広い場所で、もうしこし長い時間をもうけてもらいたいと思った。東北大ということで、おそるおそる参加したが、雰囲気が和やかで、みんな興味深い発表をしていることがわかって（あまり聞けなかったが）すごく楽しかった。バス移動も遠足みたいだった。

・個人名（インフォーマント）がでているのが怖かった。外で発表するときには、配慮したほうがよかったと思った。行くのは疲れたけれど、とても満足してかえってこれたので

よかった。本当はもっとゆっくりしたいので、泊まりでもよいと思った。行かなかった 2 年生に勧めたいとおもった。私も次の機会があれば参加したい。（注：いつも仲間内での発表が多いので、個人情報の扱いが不十分であったことを言っている。また同じ弘前大のなかでも班が異なると話す機会が限られるので、同じ大学のＢ班と話せたことを書いている。）

・他の大学生はどのようなテーマで論文を書いているのか、知ることができてよかった。卒業論文の内容について他の学生と意見交換することができて意義深かった。

⑶ 東北大学

東北大学からは、良かった点と改善すべき点をわけ、それぞれセッションごとにまとめて書かれた報告であった。

a. よかった点

第一部

・他大学の実習の様子を知ることができて刺激になった。

・自分の大学では扱われないテーマもあり、参考になった。

・弘前のグループでの調査は、東北大とはことなるかたちで、面白いと思った。

・ポスター前では意見や質問が活発に交わされていて、非常に良い形式だった。

・他大学との交流も（正直なところそこまで期待していなかったが）、面白い人がたくさんいて刺激になった。

・研究方法も自分たちとは異なるものを知ることができ、今後参考にしていきたいと思った。

・私たちの研究室の特徴というものも感じ取れたような気がする。やはり自らを見つめるためには他の文化との対比こそが必要。

第二部

・普段は自分の研究室の先生方のお話を聞く機会もそう多くはないため、こういう機会は貴重だった。

・まだフィールドワークをしていない 2 年生（おそらく）が、知らない人たちの中に入っ

ていくのがすごく不安というようなことを言っていて、ものすごく共感したのと、自分のときは意外とあっさり受け入れてもらえたことを思い出した。
・各々のエピソードには興味深い点が多く、そこでの紹介をきっかけに、続く懇談会で会話が弾んだ場面もあった。

第三部
・同じ大学生として、勉学のことだけでなく、一人暮らしやアルバイトのことまで話題は尽きなかった。本当に時間が短く感じた。
・空いた小腹も満たされ、いろいろな話を出来るというのは実にすばらしい。第三部は是非来年もお願いしたい。
・少し大学ごと固まってしまったような気もしたが、雰囲気もよく盛り上がっていたように思う。

全体
・普段は教室で教員の話を聞くという受け身の授業が多いので、このような形のイベントは非常に新鮮だった。
・他大学の、特に自分と同世代の学生の話を聞くという機会は意外になかったため、今回の試みは自分にとって非常に新鮮だったし、勉強になる面も多かった。
・開催意図の通り人類学の楽しさ、面白さが伝わってくるようなイベントだったと思う
・来年もぜひ行ってほしいし、今回会った方々にまた会う日を楽しみにしている。
・色々な人と交流して、色々な人の研究を知って、そしてそれで自分の考えが動かせる、まさに文化人類学を実践できたイベントだった。
・普段、なかなか接触することのない外部の教授陣・学生たちと交流することができたのは新鮮かつ貴重な体験であった。自分の研究についても改めて考えさせられたと同時に、新たな視野が広がったように思う。来年以降は、他大学を会場として交流するのもよいのではないだろうか。

b. 改善を希望する点

第一部

・パネルとパネルの間隔がもっと広ければよかった。

・ポスター掲示用のパネルが風で何度も倒れたらしい。この対策は必要である。

・ポスター前で意見や質問を聞く時間は取ってあるので、大教室内では簡単な題目説明程度だけでも良かったと思う。

・発表者が他のポスターを見に行く余裕がないので、時間を長くして、交代制にした方がよいのではないか。

・場所は室内にする。

・パネル発表でなく、最初の講義室で一人一人発表するほうが、皆が皆、お互いに満遍なくみられるのでは、とも思った。

・外での展示はopenな雰囲気ではあったが、風によってパネルが倒れ、ポスターは落ち、写真も落ちるということが何度もあり、そのたびに対応に追われ、受付・会計係は第Ⅰ部を見に行くことができなかった。外で展示をするためには相応の用意が必要だと感じた。

・会場が屋外で、さらに人数が多かったせいか、発表者の声が聞こえ難いことが多かったように思う。

・ポスター発表の前の各発表者による内容の紹介が長い気がした。事前の説明に時間を割くよりも、ポスター発表の時間を長めにとって、より多くのコーナーを回れるようにしたり発表を交替制にしたりして、発表者がほかの人の発表を聞けるようにしたほうがいいのではないかと思う。

・受付業務をしていて感じたことは、トイレの場所を聞かれた回数が多かったことだった。今回発表があった文1教室の下には男子トイレしかなく、（女子トイレは文2教室の下）今回は女子の参加が多かったため、トイレの場所を掲示もしくはアナウンスしておくべきだったと思った。

・口頭のみでの発表にはいささか退屈してしまった。パワーポイントのスライド数枚程度の情報（発表者・タイトル・要点・写真等）があれば、なおよかったのではないだろうか。

第二部

・時間が足りなかった。

・自己紹介をして終わりだった。

・もっとフランクなセッションを期待していた。

・担当教員によって差がありすぎ、また時間が短すぎる。

・教員側の一人ずつの返答が非常に長く、学生5・6人程度が質問して終了してしまった。

・グループ分けをしてローテーションでそれぞれの先生方のお話を聞きたいと思った。

・主に教員しかしゃべらなかったが、それぞれの班に実習をした学生を割り振り、教員に加えて、その学生の話も聞けたのならばさらによいものになったのでは。

・講師の略歴があったら、その中から気になることを質問できるので、もう少しやりやすいかとも思った。

・第一部から第二部に移るときに、場所が分からなくてうろうろしている人が多かった。各グループの場所を割り振って、全員がわかるようにどこかに掲示するか案内のプリントに載せるかするとわかりやすいと思う。

第三部

・同じ大学の学生同士で固まってしまう所も多かったので、初めのうちだけでも第二部のグループでまとまっても良いと思う。

・食事がすぐなくなった。女子が多かったこともあり、お酒の分の費用を食事にまわしても良いかと思う。

・懇親会は時間が限られており、もう少し時間があればと感じた。飲み会は長い方が親睦が深まると思う。

・大学名入りの名札を付けていたのはすごく良く、ふり仮名、学年などがあればもっと丁寧かな、と思った。

・会場の広さと人数のバランスがあまりよくなかったように思う。次回は第一食堂の一角で行ってみたらどうだろうか。

全体

・人数の割に場所が小さかった。次回も東北大でやるなら、萩ホールなど借りればよいのでは。

・ 全体の開始時間と受付開始時間を区切った方が良かったと思う。

4. まとめ

今回の「じんるいがくフェスティバル」を開催してよかったと思ったのは、学部生がどのように人類学を学ぼうとしているのか、実際に何を学んでいるのか、教師に何をもとめているのか、大学の垣根を越えて知ることができたことである。以下では、高倉が感想を述べながら全体のまとめをおこないたいと思う。

第一部の学生の研究発表は、人類学が立ち上がっていく新しい瞬間に立ち会うような感覚だった。学部過程のなかで人類学を学んだ学生が、フィールドワークと格闘しながら自分で得た調査資料を整理し、そこから議論を立ち上げていく様が如実に表れていたからである。文化人類学を教えていると民族誌資料を紹介することになるので、どうしても日本以外の話題が多くなる。しかしながら、学部の過程で調査となると経済的なこと含めて様々な理由からどうしても国内が中心となる。したがって学生たちにとってみれば、教室や本で学んだことと、自分が可能な調査の間のギャップを感じざるをえないように思っていた。しかし第一部の発表を聞いていると、文献ではなく、自分が現場に飛び込み、そして場に参与することでえることができた「話」「見聞」を資料にして、そこから分析をおこなうことができるということ自体のおもしろさを学生が実感していることを、ひしひし私自身が感じることが出来た。私自身、最近は国内の調査をしていないこともあって、学生たちが身近な日常を参与観察し、そこから人類学的考察を立ち上げている様をみるのは大変刺激的であった。

第二部は、学生の感想でも触れられているが、今回の企画のおそらく最も目玉だったといっていいだろう。教員が 2 人対談する形で、調査の裏話をするということはほとんどの学生にとっては初体験だったはずだからである。教員にしてみれば、自分の話を同僚や院生に語るということはあったかもしれない。しかし、同僚との対談という形で話題にする

のはなかなかない経験だと思われる。私自身がこの対談をおこなって感じたのは、人類学の教科書に書かれている調査方法論以外に、自分が調査のなかで何気なく行っていることを明確に言語化し、その方法としての妥当性を同僚とそして学生とともに話し合うことの心地よさだった。なぜ参与観察では、サンプリングとしての代表性よりも、偶然の出会いのなかに資料としての価値を見いだせるのかといった疑問。単に顔見知りの状態で得られる資料と、被調査者との深い人間関係をつくることによって可能となる資料の質とは何か。誰からでも得られる資料と、特定の関係を結ぶことによってしか得られない資料は、そのどちらかがいいということなのではなく、どのような問いをたてるかによって、必要となる調査の方法が変わってくる…等々。これまで自明視してきた諸問題が対談を通して明確になっていく過程は快感ですらあった。逆にいえば、自分はこれまで学生に対して実践的な意味を含めて調査方法論をどれだけ伝えることができたのか、という自問が残ったほどである。おそらく、複数の教師が自分の知識を一定の緊張感をもって相互に交換しあうというのが対談の特徴であろう。そのコミュニケーションが自分自身の人類学的知識の再認識に、さらに学生との双方向的教育という観点からの可能性を強く感じたのであった。

第三部の効用は、東北地区で人類学を学ぶ 100 人もの学生が一堂に会するという機会を作り出したことにあるといってよい。生協の食堂会場のなかで自由に動きにくくなるほど学生が集まり、それぞれのテーブルを囲んでグループができ、歓談している。これほど多くの学生が人類学を学んでいるということ自体が、自分にとってはうれしく、そして頼もしくすら感じたのである。人類学で卒論を書こうとする学生がこれほどたくさんいるという事実を確認できたこと自体が、私には喜びであった。その反面、これだけ多くの学生に対してこれまで自分は何を伝えることができたのかと自問してしまう機会でもあった。私の場合、特に研究科や学部に直接所属せずに、学内の研究センターにいるので、普段は学部生とのつきあいはそれほど多くはない。教養課程での文化人類学概論を教える以外には、専門課程では 3 年生用の半期の授業をもつだけなので、調査実習や卒論まで学生とつきあうという経験はない。それ故にこそかもしれないが、学部生への教育の可能性を今後はもっと深く考えていきたいと思った次第である。

ということで、じんるいがくフェスティバルを振り返りながら報告してきた。おそらく私の様な思いは関係者の間である程度は共有されていると思う。この原稿を書いている

2011 年 3 月初頭の時点で、すでに 2011 年度に第二回のフェスティバルをおこなうことはほぼ確定しているからだ。この企画が繰り返され、蓄積されていく中で、教員・学生の間で様々な意味での人類学的な遭遇の可能性が広がっていくことを望んでいる。

『東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange』規程

1　目　　的：『東北人類学論壇 Tohoku Anthropological Exchange』（以下、本誌）は、現代世界の諸社会・諸文化に関する広い意味での人類学的研究を掲載する専門誌として、人類学と関連諸分野における学術的交流に貢献することを目指します。本誌は、集約的なフィールドワークに基づく実証研究に高い価値を見出し、新鮮な調査報告の発信に努めます。

2　発行形態：本誌は、定期刊行の学術誌として大学図書館等に配付するとともに、オンライン版を東北大学文化人類学研究室のホームページ上に公開します。

3　使用言語：本誌の使用言語は、基本的に日本語または英語とします。

4　論文審査：投稿論文は、活字あるいはＨＰ上で未発表のものとします。論文は編集委員会において厳正に審査されます。「採用」「条件付き採用」「不採用」の結論は、編集委員を通して執筆者に連絡されます。採否および論文のカテゴリー分類についての決定は編集委員会が行ないます。編集委員会での審査内容は公開しません。

5　投稿資格：本誌に投稿できる者は、東北大学大学院文学研究科人間科学専攻（文化人類学専攻分野）に所属する教員および大学院生、修了生に限ります。ただし、編集委員会が適当と認めた場合は、これ以外の者の投稿を受け付けることもあります。

6　発行母体：本誌の発行母体は、東北大学大学院文学研究科文化人類学研究室「東北人類学論壇編集委員会」です。事務局は同研究室に置きます。

投 稿 規 定

1　投稿者は、「東北人類学論壇編集委員会」宛に、原稿（横書き）を１部送付してください。原稿は返却いたしません。

2　原稿の枚数（400 字１枚計算）は、本文と画像を含めて、50 枚以内を目安とします。

3　ワープロソフトに依存する特殊文字や外字は使用しないでください。本文中の「註」の記号は、半角数字を使用してください。

4　画像は著者が作成してください。オンライン版にはカラー画像が掲載できますが、冊子版には白黒画像のみしか掲載できません。雑誌用の画像は送っていただいたものをそのまま白黒コピーして印刷します。

執筆者紹介

陳 玨勲	台湾大学人類学科博士候選人
中嶋 朋哉	東北大学　文学部　人文社会学科 文化人類学専修　平成 22 年度卒業
成田 梨加	東北大学　文学部　人文社会学科 文化人類学専修　平成 22 年度卒業
高倉 浩樹	東北大学東北アジア研究センター　准教授
川口 幸大	東北大学大学院　文学研究科　准教授
曽我 亨	弘前大学人文学部　教授
坂井 正人	山形大学人文学部　教授

東北人類学論壇　第 10 号

2011 年 12 月 1 日発行

編 集 兼　東北大学大学院文学研究科
発 行 者　文化人類学研究室

編 集 長　沼崎一郎

発 行 所　東北大学大学院文学研究科
文化人類学研究室
〒980-8576　宮城県仙台市青葉区川内 27-1
電子メール　tohoku-anthropo@sal.tohoku.ac.jp
ホームページ　http://www.sal.tohoku.ac.jp/anthropology

ISSN 1348-4192 · Volume. 10 · December, 2011

Tohoku Anthropological Exchange

Cultural Anthropology Program
Graduate School of Arts & Letters, Tohoku University

Article

Kakhun Tan · 1
The Modern Construction of *Sensoji Honzonjigene* in Asakusa

Research Reports

Tomoya Nakajima · 22
Ties That "Housewives" Knot: Women Linking Up in a Mother's Brass Band Group

Rika Narita · 42
An Anthropological Study of "*Bunko*"(Home Library): An Examination of a Mothers' Gathering Place

Correspondence

Hiroki Takakura · Yukihiro Kawaguchi
Toru Soga · Masato Sakai · · · · · · · · · · · · · · 56
A Report of the First Anthropology Festival